

クリスマス・
キャロル（聖歌）

A CHRISTMAS CAROL

デイケンズ

katokt 訳

クリスマスキャロル 翻訳 1.00 版

チャールズ・ディケンズ著

katokt 訳 (katoukui@yahoo.co.jp)

A CHRISTMAS CAROL by Charles Dickens

(c) 2003 katokt

本翻訳は、この著作権表示を残す限りにおいて、訳者および著者にたいして許可をとったり使用料を支払ったりすることいっさいなしに、商業利用を含むあらゆる形で自由に利用・複製が認められる。「この著作権表示を残す」んだから、「禁無断複製」とかいうのはダメ)

わたしはこの精霊のでてくるささやかな物語りで、空想上の精霊をよびだして、読者が自分たちでも、お互いにでも、この季節にでも、あるいはわたし自身でも飽きがこないようにがんばったつもりだ。精霊がみなさんの家庭を楽しく訪れ、精霊が口をつぐんでしまうことを願うようなものがないように。

あなたがたの親愛なる友人でもべのC。 D

一八四三年十二月

第一章 マーレーのお化け

マーレーは死んだ、これがそもそも始まりだ。この事実にはまったく疑う余地はない。お墓の記録に牧師、教会の書記、葬儀担当者、喪主のサインがあるから。スクルージももちろんサインした。スクルージの名前ときたら、手をそめることには何でもてきめんの効果があつたものだ。

年をとつたマーレーは、とびらの金具のごとく（訳注1）亡くなつていたことにまったく疑う余地はない。

でも、わたしは自分がとびらの金具がどんなふうになつていのかを知つてゐるなんて言うつもりはない。自分としては、棺おけの金具の方が同じような道具としてはよつぽど死に近い

ものだと思いたい。いいや、でも昔の人達の知恵は例えにあるわけで、わたしのような下々の手がそれを汚すことはまかりならんということだろう。さもなくば国もほろびてしまう（訳注2）。だからみなさんもわたしが断固としてこう繰り返すのをどうか許してほしい。マーレーはとびらの金具のごとく完全に亡くなっていたと。

スクルージは、マーレーが亡くなっていたことを知っていたか？ もちろん知っている。知らないなんて事があるうか？ スクルージとマーレーはわたしが何年とも知らないほど長い間、共同の経営者だったわけだから。スクルージはマーレーの唯一の、遺言執行者にして相続人、友達にして会葬人だった。ただスクルージはそのような悲しい出来事にすっかり気落ちしてしまわずに、葬式当日でさえ抜け目のないビジネスマンぶりを発

揮していた。というのとはとてもない割引価格でその葬式をあげたということだ。マーレーの葬式のことにはふれたので、最初のお話にもどることとしよう。マーレーが死んだというのは疑いようのない事実だ。これはちゃんと意識しておかなければならない、でない、これからお話ししようとするのがなんら不思議な事とは言えなくなってしまう。もし劇を見る前にハムレットの父親が死んだと思っていなかったら、夜半に東からの風に乗じて城壁を父親が歩き回るのにはそうびつくりしたことともいえず、中年の紳士が暗くなつてから涼をもとめて無分別にも外出して、そう、たとえばセントポール寺院にでもだろうか、息子の弱々しい心を文字通りびつくりさせるといふようなことになつてしまう。

そしてスクルージはマーレーの名前を消すことはなかった。

だから何年もあとになつても、事務所のドアの上には「スクルージとマーレー」という看板がかかったままになつていた。会社は「スクルージとマーレー」として知られており、ときおり仕事に詳しくない人がスクルージのことをスクルージとかマーレーなんて呼んだものの、スクルージとききたらどちらの名前にでも返事をするのだった。結局名前などスクルージにとつてみればどうでもいいものだったから。

ただ、スクルージの仕事に対するがめつきとききたら、それはもう。スクルージ、そう彼は、搾れるだけ搾り取り（訳注3）、しめあげ、捕まえたらはなさず、ばらばらにして、握りしめ、何もかもをほしがる罪深い輩だった。火打石ほどかたくなかつ冷酷で、ただこの火打石からは鉄をつかつても慈悲の火はおこせなかつたことだろう。かれは秘密をこのみ、人と打ち解けず、

無口で孤独な性格だった。性格の冷酷さが姿も寒々しいものにしており、とがった鼻は凍りつき、ほおにはしわが深くきざまれて、その歩みはぎこちなかった。そして目は血走り、薄いくちびるは青ざめ、金切り声で抜け目なく自分の意見を主張した。頭上もまゆ毛も霜がふりつもっているかのように白く、あごはとがっていた。いたっていつも冷酷で、夏にも事務所を冷たくしたのだが、クリスマスだからといってその冷酷さがゆるむようなことは少しもなかった。

まわりが暑かろうが寒かろうが、スクルージにはなんの関係もなかった。まわりが暖かくてもスクルージを暖めることはなかったし、寒々とした気候もかれを寒がらせることはなかった。どれほど吹きすさぶ風もスクルージに比べれば身を切るほどの冷たさとはいえなかったし、降り積もる雪も目的への集中とい

うことではかれにかなわず、打ちつける雨も嘆願を聞き入れないことではかれの足元にも及ばなかった。悪天候も、どんな点からみてもスクルージほどのことはないというわけだ。どしやぶりの雨、雪、あられ、ひょうもどの点をとつても一つとしてスクルージを上回るところはなかった。天気はときどき「気前がよく」なることもあつたが、スクルージには決してそんなこととはありえなかった。

道ばたでスクルージと出くわしても、につこりして「やあスクルージさん、調子はどうですか？ 家に遊びにきてくださいよ」などと声をかけるものはいなかったし、物乞いでさえ小銭をせがむことなかった。子供もスクルージには「今何時ですか？」とは尋ねなかったし、スクルージが生まれてこの方どこそこまでの道を聞いたものも皆無だった。盲導犬たちでさえスクルージ

がどんな人かを知っているかのようだった。というのは、盲導犬たちはスクルージが近づいてくるのを見ると、飼主を門や路地の方へとひっぱったものだから。尻尾をふり、まるで「悪魔の目をもつてゐるぐらいなら、目なんて見えない方がましですよ、ご主人様」とでも言つてゐるようだった。

ただそんなことはスクルージの知つたことではない。それこそスクルージの望んだとおりだ。人生のこみあつた道を人情なんぞは知つたことかと警告しながら進んで行くことこそが、スクルージにとつての快心事だったのだから。

昔のことだが、一年の中で一番素敵な日々、クリスマスイブにスクルージは会計事務所で忙しそうにしていた。寒々とした身も凍るような気候でその上霧がたちこめていて、往来の人達が温まるために白い息をはあはあ吐き、胸の前で手をこすりあ

わせ、敷石の上であしぶみをしているのがスクルージの耳にも入ってきていた。街の時計は三時をしらせたばかりだったのに、すでにあたりは暗くなっていた、まあその日は一日中、日はささなかつたわけだが。そして周辺の事務所の窓にもろうそくがゆらめいており、その様子はまるで手でふれることができるほどの藍色の大气に赤い斑点があるかのようだった。霧はどんな隙間や鍵穴からもはいりこみ、外では濃くたちこめ、ごくごく狭い通りにもかかわらず道の向こう側の家々が幻影のように見えるほどだった。黒ずんだ雲がたちこめ、全ての物を覆い隠していくのをみると、自然というのはすぐ近くにあつて、大量の雲をつくりだしているのだと考える人がいるかもしれない。

スクルージの会計事務所のドアは開けっぱなしで、というのも事務員に目を光らせているためだった。事務員は向こうの陰

気な小さな部屋でまるで監房にいるかのようで、手紙の写しをとっていた。スクルージのところにもわずかながらの暖があったが、事務員の暖ときたらあまりに小さく、石炭一個ぽちとといった程度だった。ただスクルージが石炭箱を自分の部屋においていたので事務員は継ぎ足すこともできず、石炭のスコップをもつてスクルージの部屋にはいろいろもんなら、「われわれは別れなきやならんようだな」と言われる始末だった。そういうわけで、事務員は白い襟巻きをしてろうそくで暖をとろうとしたが、もともと想像力に満ち満ちているといったわけではなかった。たので、まあ無駄といったところだった。

「メリークリスマス、おじさん、神のご加護がありますように」
明るい声が、スクルージの甥の声がしました。ただあまりに急にやってきたので、その声がしてはじめてきたのに気づいたく

らいでした。

「ふん」 スクルージはもらしました。「たわごとを」

霧がたちこめ霜が降りる中をあまりに急いでやってきたので、甥は体がすっかり暖まり気分もすっかり高揚していました。ほおには赤みがさし美しく、目はきらきらと光り、はあはあと白い息をはきながら「クリスマスがたわごとですつて、おじさんと聞き返しました。「どういう意味なんです？ 僕にはわかりませんよ」

「その通りの意味だよ」 スクルージは吐き捨てました。「メリークリスマスだと！ なんの権利があつてお祝いするんだ？ どんな理由があつてのお祝いだ？ そんなに貧乏なのに」

「ふーん、じゃあ」甥は快活に答えをかえします。「なんの権利があつてそんなに憂鬱にしてるんです？ どんな理由があつて

の不機嫌なんですか？ そんなにお金持ちなのに」

スクルージはとつきにはいい答えがうかびませんで、「ふん」と再びいうとこう続けました。「たわごとだよ」

「そう怒らないでくださいよ、おじさん」

「そうする以外にどうしようがある。こんなばかりかどもがうようよしている世の中なんだぞ？ メリークリスマスだつて！ 言うに事欠いてメリークリスマスとは！ クリスマスなんてものは金もないのに勘定をしなきゃならんときじゃないか。また一年歳はとるがすこしばかりだつて金持ちになつてないのを確認するときじゃないか、帳簿をしめて、そのどの項目をみても一年どの月でも赤字だったことを知るときじゃないか。もしわしの思い通りになるなら」スクルージはふんぷんに怒つて言いました。「『メリークリスマス』なんてぬかす頭のたりない間抜け

どもは、お祝いのプディングなんかと一緒に煮詰めてやって、心臓にヒイラギの棒でもつきさして埋葬してやりやいいんだ。うん、そうするべきだ」

「おじさんったら」甥は嘆願します。

「甥よ」おじは冷たく言い放ちました。「おまえはおまえのやり方でクリスマスをやればいい。わしはわしのやり方があるから放っておいてもらおう」

「やり方ですつて！」甥は繰返しました。「何にもやりやしないじゃないですか」

「どうか放っておいてくれ、それから」スクルージは吐き捨てました。「クリスマスはさぞかしめでたいんだらうよ。そうだな、今までもさぞかしい事でもあつたんだらうし」

「言わせてもらえば、いい事はたくさんありますよ。でもそれで

得をしたことはないけれど」おいは答えました。「クリスマスはとくにそういうものじゃないですか。クリスマスがやってくるといつも思うんですが、神の名と起源に畏敬の念をいただくことは置いといても、まあクリスマスに属するもので畏敬の念から切り離せるものがあればですが、クリスマスはクリスマスなりにいいものだと思うんですよ。親切になり、許しあえ、慈悲ぶかく、楽しいときでしょう。長い一年のカレンダーをめくってみても、男女が閉じきつた心を開き、自分より目下の人達を、ぜんぜん違う旅路を歩んでいる別の生き物としてではなく、本当に墓場まで旅の道づれとみなす、唯一のときじゃないですか。それにおじさん、クリスマスがぼくのポケットに金や銀の切れ端ひとつ入れてくれたことがなかったとしても、クリスマスはぼくにとってはいいものですし、これからもそうでしょう。だ

から言いますよ、神のご加護がありますように」

監房にいた事務員はおもわず手をたたきました。がすぐに間が悪くなつて、火をかきまわし、最後のはかない暖を消し去つてしまいました。

「余計な音をもう少しでも立ててみる」スクルージはどなりました。「首になつてクリスマスを迎えることになるぞ。まったくこうるさい奴だ、おまえは」と甥の方をむくと、「国会議員にでもなつたほうがよからうよ」と言いすてました。

「おこらないでください、おじさん。さあ明日は僕らと一緒に夕食をとつてください」

スクルージは、おまえが墓場に、確かにそう、まったくこの通り口にしたのだつた、おまえが墓場に落ちるところをみたいものだなど。

「どうしてなんです？」甥は叫びました。「いったいどうして？」
「どうしておまえは結婚したんだ？」

「恋に落ちたからです」

「恋に落ちたからとはな！」スクルージはまるでその言葉が、メリークリスマスより腹立たしい唯一の言葉であるかのように吐き捨てた。「ごきげんよう」

「でも、おじさん、結婚する前だって来てはくれなかつたじゃないですか。どうして今になって結婚したことが理由になるんです」

「ごきげんよう」

「別におじさんにどうこうしてもらうなんて思つてませんよ。頼んでもないでしょう、どうして仲良くできないんですか？」

「ごきげんよう」

「おじさんがそんなに頑固なのは本当に残念です。一度だって喧嘩したことはないじゃないですか、僕を相手にして。でも今回はクリスマスに敬意をはらってやってみたんです。だから最後までクリスマス、おじさん」

「ごきげんよう」

「それによいお年を」

「ごきげんよう」

にもかかわらず、甥は罵倒に類する言葉はひとつも言わず部屋を後にしました。外へのドアの前で立ち止まり、事務員にもクリスマス挨拶をしようと、事務員も寒かったけれど、それでもスクールジよりは暖かい心をもっていました。というのは心をこめて挨拶をかえたからです。

「もう一人いるわい」 スクルージはぶつぶつ言いました。事務員が一週間に十五シリングの稼ぎで、妻と家族がいるにもかかわらず、メリークリスマスと言っているのが耳にはいったのです。「わしも精神病院にでも隠遁した方がいいみたいだな」

この頭がおかしい男は甥をおいだし、二人の男を中に通しました。二人はかつぶくのいい紳士で、このようすを外で楽しそうに見守っており、今は帽子をぬいでスクルージの事務所の中に立っていました。手には帳簿と書類をもち、スクルージにむかって挨拶をしました。

「こちらは、スクルージとマーレー事務所ですか」片方がリストをさししめしながら言うと、「スクルージさま、あるいはマーレーさま、どちらでお呼びすればよろしいでしょうか」と続けた。

「マーレーは亡くなつてもう七年になりますよ」とスクルージは答えた。「七年前になくなつたんです、そう七年前の今晚に」
「まちがいなくマーレーさんの寛容なところは共同経営者の方にも受け継がれているんでしような」紳士は紹介状をさしだしながら口にした。

たしかにそうだった。というのは二人は同じ性格だったからだ。「寛容」という不吉な言葉を耳にすると、スクルージは眉をしかめ頭を左右にふり、紹介状をつつかえした。

「一年で一番おめでたい時期です、スクルージさん」紳士はペンを手にしてそう切り出した。「この季節にはいつもよりもっと貧しいものや困っている人へのちよつとの施しがいただけることがあります。かれらは今でもすごく苦しんでいるんです。何千もの人々が日常の品々にも事欠くありさまで、何十万

という人たちが快適な生活を送れないのです」

「監獄がないのかな？」 スクルージは尋ねた。

「監獄は足りています」 紳士は、ペンをふたたび置きながら答えました。

「貧民収容施設はどうでしょう？」 スクルージはたたみかけた。

「あれはまだちゃんとやってるんですかね」

「ええ、まだやっていますよ」 紳士は答えました。「私からすればやってないといいたいところですが」

「それに軽作業や貧民法も活用されてるんでしょうな？」

「二つともかなり活用されていますよ」

「ああ、最初にあなたがおっしゃったことからすると、そういった仕組みがちゃんと使われなくなるようなことが何か起こったのかと心配しましたよ」 スクルージはつぶやいた。「それを聞いて

とても安心しました」

「多くの人たちにそういった施設ではクリスマスの喜びを肉体的にも精神的にももたらすことがむずかしいということ、」紳士は答えを返した。「われわれ数人が貧しいものにくらかの食べ物と飲み物、暖めるものを買ひ与える資金を集めようとしているのです。われわれが今の時期を選んでいるのは、みなにとって、不足が切実であるとともに豊かさを享受できるときだからです。さて寄付はおいくらにしましょう？」

「いいや」

「匿名がよろしいのですか？」

「放っておいてもらいたいものだね」スクルージは言い放ちました。「わしが望むことを尋ねられたから、そう答えたまでだ。クリスマスにだってわしは楽しんじゃおらん。怠け者たちを楽

しませる余裕なんざないよ。先ほどお話したような施設にもずいぶんお金をだしているんでね。もう十分金くい虫じゃないか。暮らし向きの悪い人たちはそういったところに行くべきですな」

「そういったところに行かれない人も大勢いますし、そういったところに行くくらいなら死をえらぶものさえいます」

「死にたいなら」スクルージは即答しました。「そうした方がよかろうよ。余分な人口も減るだろうし。それに、もうしわけないが、そんなことは知ったこつちやないな」

「ご存知のほずですが」紳士は異をとなえた。

「わしには関係ないよ」スクルージも反論した。「自分の商売のことをやるので精一杯なものでね、他人のことまでかまっちゃおれんよ。いつも自分のことだけでいっぱいいっぱいだよ。ご

きげんよう」

自分たちの主張をいいはつてみてもどうしようもないことは明らかだったので、紳士たちはひきあげていった。スクルージもすっかり自分のことを誇らしげに思いながら仕事にもどり、いつもよりすこし気分がよいくらいだった。

そのあいだにも霧と暗闇は濃さをまし、人々は炎のゆらめくたいまつをもち、馬車の馬の前でたいまつをかかげ、道案内をしていた。教会の古い塔、その荒々しい鐘はいつも壁のゴシツク調の窓からスクルージをいつも陰ながら見下ろしていたものだが、その姿も見えなくなった。そして雲のなかで時間と十五分の間隔を知らせ、まるで向こうにある凍りついた頭で齒をがたがたいわせているかのようにその後余韻がひびきわたった。寒さも厳しさをまし、中央通りの路地の隅では、何人かの労働

者がガス管を修理していて、大きな火を焚き、そのまわりにはぼろぼろの服を着た男たちや少年の一団が集っていた。手をかざし、目はうつとり炎をみつめていた。消火栓はほっておかれたので、あふれた水はゆつくりと凍りつき、厭世的な氷の態をなしていた。ヒイラギの枝や実がウィンドウのランプの熱でパチパチと音をたてているところの店の灯りは、通り過ぎる人々の顔を赤くそめた。鶏肉屋や食料品店の商売はまったく冗談みたいなもの、はでな飾り付けがされ、取引や販売などといった当たり前のことが何らかの関係があるとはほとんど信じられないくらいだった。市長は公邸のなかで、五十人からなるコックと召使にクリスマスを市長の家としてあるべきものとするように命じた。それにしがない仕立て屋でさえ、先週の月曜日によつぱらって道で流血沙汰をおこして五シリングの罰金を課さ

れていたが、やせた妻と赤ん坊が肉を買いに出かけているあいだに屋根裏部屋で明日のプディングをかき回していた。

霧もふかくなり、寒さもました。突きさすような、厳しい、身にしみる寒さだった。もし聖ダンスタンがいつもの武器をつかうかわりにこんな天気で悪魔の鼻を一刺ししたら、悪魔は勇気をふりしぼるために大声をあげたことだろう。寸足らずの若々しい鼻の持ち主が犬が骨をかじるように空腹と寒さでさいなまれ、ぶつぶつこぼして、スクルージの事務所の鍵穴からクリスマスキャロルで楽しませようと立ち止まったところ、最初の歌いだしで、

神のご加護を、陽気な紳士たち

心配することは何もなし

スクルージが大急ぎで定規を手にしたので、歌い手は恐れをなして鍵穴から離れ、霧の中、そしてよりその気質にあつた霜の中へと逃げ出していった。

ついに会計事務所を閉める時間がやってきた。いやいやながらスクルージは椅子から腰をあげ、監房で待ち構えている事務員にその事実を無言でみとめた。事務員はすぐにろうそくを吹き消し、帽子をかぶつた。

「明日は一日休みがほしいんだろうな」スクルージは切り出した。

「よければ」

「よくないよ」スクルージは答えた。「フェアじゃないよ。だからって半クラウンをけずつたら、虐待されてるでも思うんだ

ろう、そうだろうか？」

事務員はかすかに微笑むだけだった。

「それに」スクルージは続けた。「おまえはわしを虐待してるとは思わんだ。おまえが働いてないのに一日の給金を払うからといってな」

事務員は一年にたった一日のことだと反論した。

「毎年十二月二十五日に人のポケットから金を掠め取ろうとするには陳腐な言い訳だな」スクルージは、立派なコートの襟まですでボタンをかけながらこぼした。「でもおまえは一日やすまざるをえんのだろう。次の日はそれだけ朝早くから来てもらおうぞ」

事務員はそうしましよと約束し、スクルージはぶつぶついいながら外にでていき、その瞬間、事務室は閉じられた。事務員は長く白い襟巻きを腰の下までぶらさげながら（誇れるよう

な立派なコートを持っていなかっただから、コーンヒルを少年たちの列の端につらなりながら二十回は行ったりきたりしながら、クリスマススイブを祝って、目隠し遊びをするためにおおいそぎでカムデン・タウンの自宅へと急いだ。

スクルージは気の滅入る夕食をいつもの気の滅入る食堂でと、いろいろな新聞を全て読み、自分の預金通帳をながめて楽しい夕べを過ごしていたが、家にかえり眠りについた。スクルージは貸間に住んでおり、そこは以前は死んだ共同経営者が住んでいたところだった。どの部屋も重苦しい気分させ、庭の上に建物が積み重なっていた。まるで小さい頃、他の家とかくればををして走りこんだあげくに、隠れた場所から出る方法がわからなくなったのではと想像させるほど、不釣合いな場所にあった。ただその家はもう十分古く、荒涼としており、スクルー

ジ以外は誰もすんでおらず、他の部屋は事務所として貸されていた。庭も暗く、すみからすみまでよく知っているスクルージでさえ、やむなく手探りで足を踏み入れるといったところだった。霧と霜は家の古く黒い門のあたりに立ちこめて、まるで天候の神様が入り口のところで深く考え込んでいるかのように思えた。

さて、これは事実だが、入り口のノッカーはたいそう大きなものだという以外にはこれと違って特徴があるものではなかった。またスクルージがそこにすんでいるあいだ、朝夕にそれを目にしていたことは事実である。ただスクルージはロンドンのシテイに住んでるいかなる人とも同じ位、いわゆる想像力というものは貧困だった。それにはいささか乱暴だが、行政に携わる人も市会議員も自由市民(訳注4)もふくまれていたといつて

いいだろう。もう一つ、スクルージはこの午後七年前に死んだ共同経営者のことにふれただけでそれからは少しもマーレーのことには思いをはせなかつたことは覚えておいていただきたい。とすると誰か説明できる人がいればわたしに説明していただきたいのだが、いったいどうしてスクルージがドアの鍵穴に鍵をさしたときに、ふとノツカーをみると、とくにかわつたことが起きたわけでもないのに、それがノツカーではなくマーレーの顔に見えたなどということが起こつたのだろうか。

マーレーの顔。それは庭にある物のような漆黒の闇にあつたわけではなく、陰鬱な光があたつていた。その姿はまるで暗い貯蔵室の古くなつたロブスターとでもいうようなものだつた。怒っているわけでも、恐ろしい顔つきでもなかつたが、かつてのマーレーのようにスクルージを見つめていた。つまりは、精

霊のようなめがねを精霊のような額におしあげてスクルージの方をみていたわけだ。髪はまるで息がふきかけられているのか、熱気にさらされているかのよう奇妙な動きをしていた。そして両目は大きく開かれていたが、微動だにしていなかった。そのようすと、鉛色の肌が事態を恐ろしいものとしていた。ただその恐ろしさは、顔の一部分や表情というよりは、顔ではなく顔からもたらされるものを超越しているようにも思われた。

そしてスクルージがじつとこの現象を眺めていると、それは再びノツカーへと姿をかえた。

スクルージがまったく驚かなかったとか、小さい頃からみたこともないようなものに対して恐ろしい感じを覚えなかつたといえ、それは嘘になるだろう。でもスクルージはいったん放した鍵に手をかけ、しつかりと廻して、室内に足をふみいれ、ろ

うそくに火を点した。

ドアを閉める前にはちよつと躊躇して一呼吸おいたが、最初にそのドアの向こう側を注意深くのぞきこみ、それはまるでマレーの弁髪が廊下に現れることを半分予期しているかのようなのだつた。しかしドアの向こう側にはノッカーを留めているねじ以外は何もなく、スクルージは「はっ、はっ」といいながら、ぼたんとドアを閉めた。

ドアをしめた音は家中にかみなりのように響き渡り、上の全ての部屋、階下のワイン商のセラアのすべての樽、別々に反響して響いたようだった。スクルージはこだまに驚くような輩ではなく、ドアをしつかりしめ、廊下を歩き、階段を上って行った。ろうそくの芯をととのえながら、ゆつくりと歩いて行った。あなたがたは六頭立ての馬車が階段をさつそうと上がるだと

か、最近国会を通過したひどい法案についてだとかについて漠然とお話しになるかもしれない。でもわたしが言いたいののは、この階段で霊柩車を上げることが可能だということ、横にして、馬車の横木を壁がわに、ドアを手すりかわにすれば、簡単なことだと。広さも十分だし、余裕もある。たぶんスクルージが霊柩車が自分の前の暗闇をうごいていくのを見たと思った理由はそんなことだろう。道路の六つほどのガス灯も入り口を十分照らしてくれることはなかった、スクルージのろうそくだけではかなり暗いと思われた。

そんなことには少しもかまわずに、スクルージは階段を上がって行った。暗闇はなんといいっても安くつき、スクルージは安くつくことがなにより好きなわけだから。ただ自分の部屋の重いドアを閉める前に、自分の部屋に入って全てがちやんとしてい

ることは確認した。そう確認したくなるほどには、顔のことを覚えていたというわけだ。

居間、寝室、物置。すべてが何事もなかった。テーブルの下やソファの下に誰かがいるというようなこともない。暖炉には小さな火がくべられており、食器も用意されていて、おかゆの入った小さなシチュー鍋が（スクルージは鼻かぜをひいていたので）、暖炉の横の棚に置いてあった。ベットの下にも誰もいなかった。クロゼットにも壁に怪しげにかかっていた部屋着のところにも人の気配はなかった。物置部屋もいつも通りで、古い暖炉の覆いと、古い靴、魚籠が二個、三脚の洗面台、火かき棒があるばかりだった。

すっかり満足して、スクルージはドアをしめた。そして錠をかけ、二重に錠をした。ただ二重に錠をするのはいつもの癖で

はなかつた。脅威に対してすつかり防御をかためてから、ネクタイをほどき、部屋着にきがえ、スリッパをはき、寝帽をかぶり、おかゆをすするために暖炉の前にこしかけた。

火はとても小さなもので、これほど寒さが厳しい夜もなかつただろうに、スクルージはせいっぱい火に近づいて、ほとんど覆いかぶさるようにならなかつた。これほどわずかな燃料では暖をとることはできませんでした。暖炉も古く、どこかのオランダ人の商人から買い求め、古風なオランダのタイルがしきつめられ聖書を絵にしたかざりがさされていた。カインとアベル、ファラオの娘たち、シバの女王、羽布団のような雲で地上へ降りてくる天使たち、アブラハム、ベルシャザル、舟に乗って海へとこぎだした十二使徒、スクルージの想像力をかきたてる何百という姿があり、そしてマーレーの顔。七年前に亡くなったの

に、古代の預言者の杖のように姿をあらわし、全てを飲みこんでしまった。もしそれらのなめらかなタイルが最初から白地で、想像していたばらばらの断片からその表面にある絵が形づくられるなら、全てのタイルにマーレーの頭が浮かぶことになっただろう。

「ばかばかしい」スクルージはそうもらすと、部屋を歩きはじめました。

何度かいつたりきたりした後、ふたたび腰をおろし、椅子に頭をもたれかけました。視線はふと呼び出しのベルに、今は使われていないけれど、部屋についているものに留まりました。それは、建物の一番上の階のある部屋と今は忘れられた目的でなんらかの連絡をとるために使われていたベルでした。そして驚いたことに、薄気味悪いことでも、言葉にならないほど恐ろ

しいことですが、スクルージが見ているとそのベルがゆれはじめたのです。はじめはゆつくりとゆれていて、音がするかしないかといったところでした。ただだんだん音が大きくなり、それも家のすべてのベルが音をたてたのです。

これは三十秒か一分ほどのことでしょうか、ただ一時間にも思われました。ベルははじめたときとおなじように全ていっしょに鳴り止みました。まだカラン、カランという音が階下からは聞こえてきました。まるでだれかがワイン商人のセラ一の樽に重いくさりをかけて、引いているような音です。それでスクルージは、お化け屋敷では精霊が鎖を引いているということを知った気がえました。

セラ一のドアがぶきみな音をたてて開き、スクルージの耳にはその音は階下でいつそう大きくなりひびきました。そして階段

をのぼってきて、まつすぐ自分の部屋のドアのところまでやってきます。

「まつたくばかばかしい」スクルージはひとりごちました。「信じやしないぞ」

ただすぐさま重いドアを通りぬけて、眼前に姿があらわれたときにはスクルージも顔色を失いました。入つてくると、消えかかっていた炎がもえあがり、それはまるで「知ってるぞ、マーレーの精霊だ」とでも叫んだようで、すぐに元の大きさにもどつた。

同じ顔、そうまつたく同じ顔でした。弁髪のマレー、いつものチョッキを羽織り、タイツを身につけ、ブーツをはいていた。ブーツのふさは弁髪のように逆立っていて、ひきずつていた鎖は腰まわりにからみついていた。長く、まるで尻尾のよう

だった。鎖は（スクルージがじつくりと観察したところでは）、金庫、鍵、南京錠、元帳、証書、鉄でつくられた頑丈ながまぐちなどで作られていた。マーレーの体は透きとおっていて、スクルージがよく観察すると、チョッキの向こう側がみえ、上着の二つのボタンがみてとれた。

スクルージはマーレーには腸がないときいたことがあったが、今までそんなことは信じてなかった。

いや今でもそんなことは信じなかった。目の前に立っている精霊の姿を何度も何度も見返し、その死んだように冷たいまなざしでぞつとし、頭やあごに巻きつけられていた折りたたまれたハンカチのようなものに気をとられたが、以前はそんなものはみたこともなかった。そしてまだスクルージは疑っていて、五感と戦っていた。

「どうしたのかな」 スクルージはいつも通り皮肉つぽく冷静に言った。「わしに何かしてほしいとでもいうんだか」

「たんまりな」 疑いなくマーレーの声だった。

「おまえは誰だ」

「誰だったかと聞くんだな」

「じゃあ誰だったんだ？」 スクルージは声をあらげて尋ねました。「影（訳注5）にしちゃ、気難しいね」という言葉につづけて、「些細なところまで（訳注5）」といおうとしたが、場にそぐわないのでそれは控えた。

「現世では、おまえの共同経営者だよ、ジェイコブ・マーレーだ」

「どうだい、腰をおろせるのかい」 スクルージは疑わしそうに見つめながらもそう勧めた。

「そうしよう」

「どうぞ」

スクルージがそう質問したのは、透明な精霊が椅子に腰をおろせるのかがよくわからなかったからだ。無理だった場合には困惑した説明をうけなければならなくなると思ったわけだ。ただ精霊は暖炉をはさんで反対側に腰をおろし、そうするにはすっかり慣れていているかのようだった。

「私の存在を信じてないな」精霊ははつきり言った。

「信じてない」スクルージ。

「目で見るとどんな証拠があれば私の実在が信じられるんだい？」

「わからない」

「自分の目を疑うのかい」

「いやつまらないことで影響をうけたりもするからな」スクルージは答えた。「胃の調子が少し悪くてもだまされたりするし、おまえさんは消化しきらなかつた肉の端切れとかマスタードのしみとかチーズのかけらとか生煮えのじゃがいものかけらなんじゃないかい。何者だろうが、墓場より飯場といった風情だぞ」

スクルージはふだんはジョークをとばしたりすることはなかつたし、このときも決して心の中ではおどけるつもりは毛頭なかつた。じつさいのところは、平気を装つてみて、注意をそらし、恐怖に打ちのめされないようにしていたのだ。精霊の声はまったく骨の髄までしみわたるものだったから。

すわつて、その微動だにしない目を見つめてみると、いつときでも口をつぐんでいると悪魔でもみいられそうにスクルージは感じたのだ。精霊が悪魔のような雰囲気をもつてだしている

ところにもどこか非常に恐ろしいものがあつた。スクルージは自分でそう感じたわけではなかつたが、まさしくそうだった状況におかれていた。というのも精霊はまったく動かずに腰をおろしているのに、その髪や裾やふさは、オーブンからの熱気にあおられているように揺れていたからである。

「この爪楊枝はみえるのかい？」スクルージは、いま挙げたような理由で攻勢に転じた。そして自分を見つめている微動だにしない視線を少しでも外してくれないかと望んだのだ。

「見えるよ」精霊は答えた。

「見てないじゃないか」とスクルージ。

「でも見えるんだよ」と精霊。

「そうか」スクルージは続けた。「ただこれを丸のみこみすりやいいんだな。そうすりやあとは自分でつくりだしたゴブリンの

群れに一生追いかけられると。まったくばかばかしい。言つてやるよ、ばかげてるぞ」

その瞬間、精霊は恐ろしい叫び声をあげ、鎖を不吉なほどがちやがちやいわせ、スクルージは気を失わないように椅子に強くしがみつかなければならぬくらいだった。ただスクルージの恐怖がどれほどのものになっただろうか、そう精霊が頭にまいていた布をまるで室内でこんなものを身につけているのは暑すぎるとばかりにとりさつた際に、下あごが胸のところまでだらんと下がった時には。

スクルージはひざまづき、両手を面前であわせた。

「お許してください」スクルージはもらした。「恐ろしい精霊や、どうしてわしを苦しめるのじゃ」

「世俗にすっかりまみれたやつだな」精霊は答えをかえした。

「おまえは私の存在を信じるのか、どうだ」

「信じます」 スクルージは即答した。「信じますとも。ただいたいどうして精霊が地上を歩いたりしてゐるんです、そしてどうしてわしのところにやつて来たんで？」

精霊が答えるには、「全ての人は内なる魂を同胞のあいだに広く歩きまわらせなければならぬんだ、遠くまで幅広く旅させるわけだ。もし生きてゐる間にそうしなかつたのなら、死んだ後にそうさせられることになる。世の中をさまよい歩く運命になるんだ、ああ、なんてことだ！ 分かち合うこともできないものをただ見るだけの運命だ。生きていれば分かち合せて、幸せになれたかもしれないものを」

ふたたび精霊は叫び声をあげ、鎖をゆらし、ぼんやりした両手で身悶えた。

「しばりあげられているのは」 スクルージは震えながら尋ねた。「どういふことなんだ？」

「現世で鍛えた鎖でしばられてるんだ」 精霊は答えた。「一輪ずつ、すこしずつ、伸ばして行つたのだ。自分自身の意思で身につけていったんだ。自分自身が望んで、しばられたんだ。おまえはこれに見覚えはないか？」

スクルージはいよいよ身震いが止まりません。

「あるいは」 精霊は続けました。「こんなふうにおまえさん自身にきつく巻きついていっている重さと長さを知りたいかな？ 七年前のクリスマスからでもこれくらいの重さと長さは十分あろうことだよ。それ以来、あんたはがんばってきたからな。ずっしりした鎖だよ」

スクルージは自分の周りにも五十や六十尋もあるような鉄の

鎖が巻きついているのではと思つて、自分のまわりの床を見まわしました。ただその目には何も映りません。

「ジェイコブ」スクルージは、嘆願するように言いました。「ジェイコブ・マーレーや。教えてくれ、わしを安心させてくれ、ジェイコブ」

「何もいえない」精霊は答えました。「他の世界からやつてくるよ、エベネーザー・スクルージ。他の私が他の種類の人のところへ運んで来るんだよ。言いたいことは言えないんだ。私に許されていることは、あとほんのちよつぴりだ。私には休息もなければとどまることもできないし、どこかに居座ることもだめなんだ。私の魂は自分の会計事務所から足を踏み出したことすらなかった、なんてことだ、生きているときには私の魂はお金を扱う狭い穴の中から這い出ようともしなかつたのに、今は果

てしない旅が私の前にはあるんだ」

考え込むときはいつも、ズボンのポケットに両手をつっこむのがスクルージの癖でした。精霊が言ったことをよく考え、視線は下をむけ、すわったままです。

「とてもゆつくり歩き回っているにちがいないな、ジェイコブ」
スクルージは思いやりと敬意はこめながらも事務的な口調で言いました。

「ゆつくりだよ」精霊もくりかえします。

「死んでから七年」スクルージは思いにふけりました。「そのあいだずっと旅をしていると」

「ずっとだ」と精霊。「休みもなく、安寧もなく。たえまなく良心の呵責に苦しめられながら」

「はやく旅はできないのか？」スクルージは聞きました。

「風のつばさに乗ればな」精霊は答えます。

「七年じゃ、さぞかしいろんなところへ行つたんだらうな」

精霊はこれをきくと、また叫び声をあげました。夜の静寂のなかで鎖をものすごい音でがちやがちやいわせ、それは行政が騒音で訴えてもおかしくないくらいの勢いです。

「ああ、囚われの、しばられた、手かせ足かせがかけられているものは」精霊はさげびました。「なんにも知らないのだ。この世では不死身の存在による不断の働きは、善が全てに広まるまでには永遠の時を必要とするということ。小さな持ち場でいっしょうけんめい働くキリスト教徒の魂が、どんなものであれ、あまりに短いその生をどれほど有用なものと思い出せるのかも知らないのだらう。一生の機会を誤つたものは、どんなに後悔しようが償いがつかないということを知らないとは。なんてこ

とだ、それが私だったんだ、そう他でもない私自身だったんだ」
「でもおまえさんはいつも有能な商売人だったじゃないか、ジェイコブ」 スクルージは口ごもりながらいました、自分にもそれをあてはめて。

「商売！」 精霊は両手をふるわせてさげびました。「人類のためになることこそが、私のやるべきことだったのだ。チャリテイ、慈悲、寛容、博愛こそ私がやるべきだったことだ。私が商売でやっていた取引なんぞは、私がやるべきだったことの広大な大海のほんのひとしづくに過ぎなかったのだ」

精霊はまるでそれこそが尽きせぬ悲しみの源泉だといわんばかりに鎖を腕の長さだけでもちあげ、ふたたび床にどしんと放り投げました。

「すぎゆく一年のこの時期には」 精霊はもらしました。「私は一

番苦しむのだ。なぜ仲間が群がる中を伏目で通りすぎたのか？
決して目をあげて賢者を貧しい家へと導いたあの大きな星をみ
なかつたのか？ その光が私を導いてくれるような貧しい家は
なかつたのか？」

スクルージは精霊がこういった調子で語るのを聞いてとても
ろうばいし、ひどく震え出しました。

「聞くがいい」精霊はさげびました。「私は行かねばならん」
「聞きます」スクルージは答えました。「でもわしをいじめんで
ください。ごちゃごちゃ飾りたてんでください、ジェイコブ。
お願いだから」

「どうしておまえの前に目に見える姿で現れたかは、言えない。
私は何日も見えない姿でおまえの側で腰をおろしてたんだがな」
それは気分がいいことではありませんでした。スクルージは

ぞくぞくつと身震いし、額の汗をぬぐいました。

「そうしているのも私の贖罪としては楽な部類じゃないんだ」精霊は続けました。「私は今晚おまえに警告しにここにやってきたんだ。おまえには私の運命からのかれるチャンスと望みがまだあるからな。私がもたらせるチャンスと望みがあるんだよ、エベネーザー」

「あなたはいつもいい友達だったよ」スクルージは言いました。「ありがとう、ありがとう」

「おまえは」精霊は口をひらきました。「三人の精霊の訪問をうけるだろう」

スクルージの頭は、精霊の頭が落ちたのと同じくらいがつくりとさがった。

「それがあなたが言ったチャンスと望みなんですか、ジェイコ

「ブ」 スクルージはどもりながら問いただした。

「そうだ」

「わしは、わしにはそうは思えませんが」

「三人が訪問しなければ」 精霊は続けました。「私が歩んでいる道を避けることは望むべくもないな。最初は明日で、鐘が一時を知らせたらだよ」

「一度に全員来てもらうわけにはいきませんか、それで全部まとめておしまいと、ジエイコブ」 スクルージは提案しました。

「二番目は次の晩の同じ時刻。三番目はその次の晩の十二時の鐘の最後の音がなりやんだときに。もうそれ以上私を見ることでなく、自分のために、私とのあいだで交わされたことによく注意を払うように」

これを言い終わると、精霊はテーブルからほうたいを手に取り

り、前と同じように頭にまきつけた。スクルージにも下あごがほうたいでもちあげられて歯がカチリと鳴らした音でそれがわかった。思いきつてふたたび視線をあげると、信じられない訪問者はすくつと立ち、鎖が体と腕にまきついた状態で彼と対面していた。

精霊は後ずさり、一步、また一步、そのたびに窓が少しずつせりあがり、精霊が窓のところまで来たときには大きく開いていた。精霊はスクルージにこちらにこいと手招きをして、スクルージもその通りにした。お互いに二歩の距離のところまできたときに、マーレーの精霊は手をあげ、それ以上近づかないように注意した。スクルージは立ち止まった。

マーレーに従ったというよりは、驚きと恐怖のあまりということだったが。というのも手をあげたときに、スクルージはな

んともいえない音がひびくのを感じたからだ。ばらばらの悲しみと後悔の入り混じった音だった。筆舌に尽くしがたい悲しみと自責の念。精霊は一瞬耳をすますと、悲しみに満ちた歌に加わった。そして荒涼とした漆黒の夜へとふらふら出て行つた。

スクルージは好奇心で我をわすれ、窓のところまでその姿をおい外を見た。

外には精霊がたくさんいて、落ち着かない様子でうめき声をあげながらあちこちをさまよい歩いていた。全員がマーレーと同じような鎖を身につけていた。何人かは（一緒に罪を犯したもののたちだろう）一緒につながれていた。だれも鎖を身につけていないものはなかった。多くは生きているときにスクルージの個人的な知り合いだった。その中の老人の精霊とは特に親しくしていて、白いチョッキをきて、くるぶしのところに巨大な

鉄製の金庫をつけていて、階段のそばにいる子供を連れた不幸な女性を助けられないことに嘆き悲しんでいた。かれらがみな不幸なことは明らかだった。人間の世界における善とのふれあいを求めているのだが、永遠にその力を失ってしまったのだ。

こうしたものたちが霧の中へと消えて行つたのか、霧がこうしたものを飲みこんだのか、スクルージにはわからなかつた。でもその姿と声は一緒に消えて行つた。そして帰宅したときと同じような夜がやってきた。

スクルージは窓をしめ、精霊が入つてきたドアを調べて見た。自分の手で施錠したときそのまま二重に錠がかかつており、ボルトもゆるんでいかなかった。スクルージは声にだしてみようとした。「ばかばかしい」と。でも気持ちが高ぶり、そうすることはやめた。一日の疲れか、目に見えない世界を見てしまったから

か、夜更けだったからか、睡眠が必要だった。まっすぐベット
へ向かい、部屋着のまま、すぐに眠りについた。

訳注 1

Old Marley was as dead as a door-nail. 慣例表現 完全に、
すっかりぐらゐの意味

訳注 2

私たちは、ある国に住むのではない。ある国語に住むのだ。祖
国とは、国語だ。それ以外の何ものでもない。シオラン

訳注 3

スクルージと squeezing (搾り取る)

訳注 4

Every (ロンドンのシテイーの) 自由市民、市職員を選出する
権利を持つ

訳注 5

for a shade (影にしちや) と to a shade (些細なところまで)

第二章 三人のうち最初の精霊

スクルージが目を覚ましたときあたりはとても暗く、ベッドからでてみると寢室のくすんだ壁とすきとおった窓の区別がほとんどつかないくらいだった。探るような目で暗闇を見通そうとしたが、そのとき近くの教会の鐘が四十五分をしらせスクルージは何時かをききとろうとした。

びっくりぎょうてんしたことに、莊嚴なる鐘は六、七、そして七、八、とうとう十二で終わつた。十二時とは。自分がベッドに入ったのは二時を過ぎていた。時計が狂つてる。つららでも入つたに違いない、十二時とは。

スクルージはこの途方もない時刻をただすために自分の時計

のボタンをおした。そのせわしげな小さな音は十二回なりひびき、そしてとまった。

「なんだって、ありえないぞ」とスクルージはひとりごちた。「まるまる一日眠りこけてて、次の日の夜になっただって。太陽がどうかしちまったにちがいない、昼の十二時だよ」

この考えはもつとも思えたので、ベットから飛び出ると、手探りで窓の方まで行つた。部屋着のそでで霜をおとさなければ何もみえなかつた。ただそうしてみても、ほとんど何も見えなかつた。分かつたことといえは、まだすぐく霧がかかつていてとても寒いということ、そしてあちこちを走り回っていたり、あわてふためいてる人の音は聞こえなかつたということだ。もし夜が昼を駆逐しずっと夜のままになつてしまつたら、まちがいなく騒がしかつただらうから、これでまあ一安心というわけ

だ。というのも「エベネザー・スクルージの指定どおりこの小切手が一覽されてから三日後には支払うこと」などというのは、数えるべき日がなければたんに国が保証してくれるものにはすぎなくなってしまうだろうから。

スクルージはふたたびベットにもどると何度も何度もこのことについて考えたが、結局考えはまとまらなかつた。考えれば考えるほど、わけがわからなかつた。そして考えないようになればするほど、どうしても思いはそこへともどつてしまうのだつた。

マーレーの精霊がとくに気にかかつた。すべては夢だつたんだとじつくり考えて自分の中で考えがまとまるたびに、また強**い**ばねがはじけるように最初にもどつてしまい、始終同じ問題が心にうかんできた。「あれは夢だつたのか、あるいはそうでは

ないのか」

スクルージは鐘が四十五分をしらせるまでそんなことを考えていたが、とつぜん精霊が鐘が一時をしらせるときに訪問があるということ警告したのを思い出した。そしてその時間まで起きていることにした。寝ないことが天国にいけないことと同じだとおもえば、たぶん寝なかつたのは出来るだけのこととしては一番賢いことだろう。

あと十五分はとても長く、無意識のうちにも眠りにつきそうになつて、時計を聞き逃したのではと思うのも一度や二度ではなかつた。とうとうスクルージの耳にも鐘の音が響いた。

「ガラン、ガラン」

「十五分」スクルージは数えながら言った。

「ガラン、ガラン」

「三十分」

「ガラン、ガラン」

「あと十五分」

「ガラン、ガラン」

「時間だ」スクルージはかちほこつたようにもらした。「でも何も起きない」

スクルージが言葉をもらしたのは鐘が鳴り響く前で、いま荘厳で鈍くどこかうつろで憂うつな鐘の音が響いた。その瞬間に、部屋に光がさし、ベットのカーテンが開いた。

ベットのカーテンは開いた、ちゃんと一言おう、そう、一つの手で。それも足や背中の方のカーテンではなく、まさしく顔が向いている方のカーテンだ。ベットのカーテンは開いた。そしてスクルージはいそいで体を半分おこし、カーテンをひいたこの

世のものではない訪問者と正面から向き合うこととなった。まるでわたしとあなたがたと同じくらい近くに。そう、わたしも実はあなたがたの心のすぐ側に立っているんですがね。

訪問者のすがたは奇妙なものだった。子供のようでもあり子供というよりは老人のようでもあり、この世のものではないふうに見えるので、姿がうすれていき子供の背格好にまで縮んだとでもいうようだった。髪は首と背中までたれさがり、年をとっているかのように真っ白だった。ただ顔にはしわが一つもなく、肌は若い人のものだった。腕はとても長く筋骨たくましかつたし手も同じで、まるでとんでもない力でものを掴むかのようにだった。そして足もすらつとしていて、腕とおなじくらいむきだしになっていた。まっしろなガウンをはおっていたが腰のまわりにはかがやくベルトをしており、その衣装は本当にうつくしかつ

た。手には若々しい緑のヒイラギの枝をもち、それは冬のしるしにもかかわらず、装いには夏の花がかざられていた。しかし全体で一番奇妙だったのは、頭にいだかれた冠から光の洪水があふれていることだった。そのおかげでさきほどのようなことが全部みてとれたのだ。そしてもつと光を弱めたい場合は、まちがいなく今は脇にはさんでいる大きなろうそく消しを帽子に
して使うんだらう。

ただスクルージがだんだん落ち着いて見てみると、このこと
でさえ一番変わっている特徴とはいえなかった。というの
は、ベルトがある場所できらつと光ると、次には別の場所
で光り、あるときは明るく次には暗く、だから全体の姿も形をかえ、
今は手が一本と思うと次のときには足が一本、そして足が二十本、
頭がない二本足、体がなく頭だけといった具合だった。体もど

ろどろにとけ、輪郭も漆黒の闇に溶けてはつきりとしなかった。ただすごく不思議なことにそうなっていて、もまた元にもどり、明確な輪郭のはつきりした姿になるのだった。

「あなたは、わしのところに来る予告されていた精霊でしょうか」 スクルージは尋ねてみた。

「そのとおり」

声はやさしく落ち着いていた。すごく低い声で、まるですごく側にいるのではなく、ずっと遠くにでもいるかのようだった。

「どなた、というかあなたは何なのですか」 スクルージはたたみかけた。

「昔のクリスマスの精霊だよ」

「ずっと昔のですか」 スクルージは、その小柄な姿を目にしてたずねた。

「いやおまえの昔だよ」

たぶん誰かに聞かれてもスクルージにもどうしてか説明できなかったでしょうが、かれは精霊が帽子をかぶっているところを見てみたくなり、かぶってほしいとお願いしてみました。

「なんだと」精霊は声をあげました。「世俗にまみれた手で私の光をこんなすぐに消すつもりとはな。おまえは、こういうつた帽子をつくるのに情熱をかたむけ、わたしに目深にこれをかぶらせようと永遠とがんばっているうちの一人だつてことで十分じゃないのか」

スクルージはうやうやしく、あなたの氣に障ることをわざとしたり、自分としては精霊にむりやり帽子をかぶせようとするなんてことはいままで思いもよらなかつたと言ひ訳をした。それから大胆にもどうして自分のところにやってきたのかを尋ね

た。

「おまえの幸せのためだよ」精霊は答えた。

スクルージはとても感謝しているといったが、夜の眠りを邪魔しないでくれた方がどれだけ自分の幸せになっただろうかと考えずにはいられなかった。精霊はまるでスクルージの考えをよくみとったように、すぐにこう言った。

「おまえの更正のためだと言ったほうがいいみたいだな、さて」
そして話しながら手をさしのべると、やさしく腕をまわした。
「起きて、わたしと一緒に歩くんだ」

スクルージが天候と時刻が歩き回るのにはふさわしくないと嘆願しても無駄だっただろう。ベットは暖かく温度計は氷点下をさしていたとか、薄着ではいてるものといったらスリッパと部屋着とナイトキャップだけで、そのとき風邪をひいてるといっ

たところで無駄だっただろう。手は女性のようによさしかつたが、抗いがたいものだった。スクルージは起き上がり、精霊が窓の方へと行くのを目にして、上着をつかみ嘆願した。

「わしは人間だよ」スクルージは異議を申し立てた。「下に落ちこちまう」

「そこにわたしの手がふれるから我慢するんだな」精霊はそう答え、心臓の上に手を置いた。「そうすればこういった場合だけじゃなくても支えてやれるからな」

そういつているあいだにも、壁を通り抜け、かれらは左右に畑がひろがる田舎のひらけた道にたっていた。街は姿を消しあとかたもなかった。暗闇と霧もともに姿をけし、そこははれやかで冷ややかな冬の日であり地面には雪がつもっていた。

「すごい」スクルージはあたりをみまわし両手を組み合わせ、声

をあげた。「わしはこの土地で育つたんだ、子供のころここにいたんだ」

精霊はやさしいまなざしでスクルージを見守った。精霊がやさしくふれたのは、軽くほんの一瞬だったが、老人の感覚ではずっとそこにあるかのようだった。スクルージは、さまざまなたくさんの香りがあたりにはただよっているのに気づいた。それぞれのさまざまな香りはさまざま長いあいだ忘れ去られていた考えや希望、喜び、気づかいに結びついていた。

「おまえの唇はふるえてるな」精霊は言った。「ほおには何かついでるぞ」

スクルージはいつもとは違う声でもごもごと、にきびだと答えた。そして精霊に行きたいところに連れて行ってくれと頼んだ。

「この道をおぼえているか」精霊はたずねた。

「覚えている」スクルージは熱のこもった声で答えた。「目をつむったって歩けるよ」

「なんだってこんなに長いあいだ忘れていたのかな」精霊はつぶやいた。「さあ行こうか」

二人は道を歩いていって、スクルージはすべての門、ポスト、木を覚えていた。そして小さな市のたつ町が遠くにあらわれ、橋、教会、曲がりくねった川があつた。毛足のながい小馬が何頭かかれらの方に歩いてきて、その背中には少年がのつているのが目にとまつた。その子供たちは農民たちが駆つている軽馬車にのつている他の少年たちに声をかけていた。そういつた子供たちは元気一杯でおたがいになりあい、とうとう広い野畑が軽快な音にみちて、さわやかな大気が笑い出したかのようだつ

た。

「これらはかつて存在したものの影にすぎない」精霊は語った。
「わたしたちの存在には気づかないんだよ」

陽気な一団がやってきて、スクルージはそのひとりひとりの名前をあげることができた。いったいどうしてかれらの姿をみてスクルージはこの上ない喜びを感じたのか？ いったいどうしてその冷たい目は涙にぬれたのか、またかれらが通り過ぎていくときにはげしい動悸がしたのか。かれらがお互いにメリークリスマスと、辻やわき道で自分たちの家へと別れるときに声を掛け合うのが聞こえたのがどうしてこれほど嬉しかったのか。メリークリスマスが、スクルージにとってなんだというんだ。メリークリスマスだって。いままでメリークリスマスがスクルージになにかをしてくれたとでも言うのだろうか。

「みんなが学校からかえつてきたわけじゃない」精霊は言葉をもらった。「ひとりだけ、友達からも仲間はずれにされて、そこに残っている子がいる」

スクールジは自分もわかつていると、うなずいた。

ふたりは大きな道はずれて、よくおぼえているわき道へと入つていった。するとすぐにくすんだ赤いレンガでできていて、小さな風見鶏がのつている丸屋根でベルがついている大きな建物についた。そこは大きな家だったが、破産した家だった。というのも広々とした部屋もほとんど使われておらず、壁はしめつていてコケむしており、窓は割れていて門も朽ち果てていた。鶏が小屋でコッコと鳴き声をもらし歩き回り、馬車入れや物置小屋には雑草がおいしげっていた。そして室内にもむかしの面影はとどめていなかった。荒涼としたホールを入つていくと多

くの部屋のドアが開きつぱなしで、のぞいてみると家具もほとんどなく寒々しく広々としていた。空気には土臭さがあり冷え冷えとしていて、それはろうそくはたくさん立っているのだが、食べるものはそれほどないという光景を連想させた。

精霊とスクルージはホールをよこぎり、家の裏手のドアまでやってきた。ドアがあくと広々とした何も無い陰鬱な部屋が姿をあらわし、かざりもなにもない松材のいすや机がいくつかならんでいるのがいつそうむきだしな感じを与えていた。そのひとつで、ひとりの少年がわずかな暖のそばでだが読書をしていた。スクルージも椅子のひとつに腰をおろし、かつての忘れ去った自分の姿を目にして涙をながした。

家の中では物音ひとつも、壁のむこうからネズミがチュウチュウ鳴いたりばたばたしているのさえ、あるいは荒れた裏庭

で半分こわれた雨どいから水がもれる音も、元気がないポプラの葉のない大枝のため息も、空の貯蔵庫のドアが無駄に開いたり閉じたりしているのも、暖炉の火がはじけるのでさえ、そのどれもがスクルージの心をなごませ、そしていつそうスクルージに涙をあふれさせた。

精霊はスクルージの腕にふれると、熱心に本を読みふけている昔のスクルージ自身を指さした。とつぜんひとりの男が外国風の衣装をまとつて、見た目は立派で目立つふうだったが、窓の外にたっていた。ベルトに斧をはさみこみ、薪をつんだ口バの手綱をひいていた。

「ああ、アリババさんだ」スクルージは感極まつて言葉をもらした。「なつかしい素敵なアリババさんだ。そうだ、そうだ。あるクリスマスするとき、あのひとりぼっちの子供がここでひとりつ

きりだったときに、アリババさんははじめてああいう風にきてくれたんだ。かわいそうな坊や、それにバレンタインも」スクルージは続けた。「それからあの乱暴な兄弟のオルソン。みんないつしよだった。それにあいつの名前、ダマスカスの門で眠ったまま、股下をはいたまま置いていかれた奴。あれが見えるでしょう。それに守護神によつてさかさまにされた悪魔の馬丁。ほらさかさまになつてゐる。お似合いだよ。うれしいな。なんだつてあいつがお姫様と結婚しなきゃならないんだ」

スクルージがこんなことについて、笑つてゐるとも泣いてゐるともつかないような興奮した声で心のそこから熱心に語つてゐるのを聞いたり、その高調し興奮した顔をみたなら、街でふだんのビジネスの付き合いのある人たちはどれほど驚いたことだろう。

「オウムだ」スクルージはさげびました。「緑の体に黄色の尻尾、頭の上にはレタスみたいなものがついてる。あいつだ、そうロビンソー・クルーソー。島を一周して帰ってきたときに、オウムが呼びかけている『ロビンソー・クルーソー、どこにいったの、ロビンソー・クルーソー』夢をみていたのかと思っていたがそうではなく、オウムだったわけだ。フライデーもいる。入り江をめざして全速力で駆けている。おーい、おーい」

それから急にいつもの様子とはうってかわって、昔の自分をあわれんでこうもらした。「かわいいそうな子供だ」そしてふたたび泣き始めた。

「そうしてやればよかった」スクルージはポケットに手をいれてつぶやきました。目をそででぬぐい、少年の姿を追っています。「でももう遅すぎる」

「どうしたんだい」精霊はたずねました。

「なんでもありません」スクルージは答えます。「なんでもありません。ただ昨晚ドアのところにクリスマスキャロルを歌っていた少年がひとりいて、なにかをやればよかったのにと。それだけです」

精霊はおもいやりのある笑顔をみせ、「さて別のクリスマスを見に行こうか」といいながら手をふった。

スクルージの子供の姿は一瞬にして大きくなり、部屋は少しくすくすとして汚くなりました。窓枠はちぢみ窓にはひびがはいっており、せつこうのかけらが天井からおちてきて、そのかわりにはだかの下地が姿をみせた。ただいったいどうしてこういうことが起こったのかは、スクルージにもまったくわからなかつた。スクルージにわかつていたことは、ただこれがきわめて正

しいことだということだった。なにもかもが起きるべくして起こったことであり、そしてふたたび他の子供たちが楽しい休暇で家に帰ったのに、スクルージはまたもやひとりぼっちだった。スクルージはこんどは本をよんでおらず、肩をおとしてうろろう歩き回っていた。

スクルージは精霊の方をみて、悲しげに頭をふり、心配そうにドアの方をみやった。

そしてドアがひらき、少年よりもつと小さな少女がかけこんできて、両腕を首に回してなんどもキスをして、「お兄ちゃん、お兄ちゃん」と興奮しながら口にした。

「わたしはお兄ちゃんが家にかえってこれるようきたの」少女は小さな手をたたいたり、笑いころげながらそういった。「家に帰ってきてよ、家に」

「家にだつて、ファン」少年は答えた。

「そう」よろこびいっぱい少女が返事をした。「家にね、それもずっと。家なの、それもいつまでも。お父さんは前よりずっとやさしいから。家は天国みたい。お父さんがある素敵な晩に寝るときわたしにやさしく話しかけてくれたから、わたしもおもいきつてお兄ちゃんに家に帰ってきたらどうかしらつてもう一回おねがいしてみたの。そうしたらお父さんはうんつていったわ、帰つてこいつで。で、わたしを馬車に乗せて迎えにやらせたの。お兄さんも大人になるんだし」少女は両目を見開いてつぶけた。「ここにはもうもどつてこなくていいでしょ。でもその前にいっしょにクリスマスを過ごせるの、すつごくすてきなクリスマスをね」

「おまえはまったく大人だよ、ファン」少年も声をあげた。

少女は両手をたたき笑い転げ、少年の頭にさわろうとした。でもあまりに小さかったので、また笑い転げ、つまさきだちして少年をだきしめた。それから子供みたいに一生懸命兄をドアの方へとひきずっていき、少年もよろこんでそれに従った。

「スクルージの荷物をここへ持って来い」という恐ろしい声がホールにひびき、校長が姿をあらわし、スクルージを見下すような態度で一瞥すると、握手をしてスクルージをふるえあがらせた。そして二人をまるで古い井戸の中といったような寒さでぞくぞくするような客間へまねきいれ、そこはいつもぞくぞくするような感じで、壁の地図も、窓のところの天体儀と地球儀も寒さで青白く見えた。ここで校長はふしぎなほどさっぱりしたワインとふしぎなほどくどいケーキをもちだしてきて、二人にすすめてくれた。それからやせこけた召使に御者にもなにか

いつぱいすすめるよう申し付けた。ただ御者はお礼は言ったが、前にいただいたのと同じならけっこうです、と答えたということだった。そのときまでにはスクルージのトランクも馬車の上に積みこまれ、子供たちは喜び勇んで校長に別れをつけ馬車にのりこみ、楽しそうに庭の方へと去っていった。馬車の軽快な車輪は、常緑種の濃緑の葉っぱからスプレーのように白霜や雪をまきちらした。

「いつもはかなげな娘で、一息でふきとんでしまうほどだったな」精霊はそうもらした。「でも心は広い娘だった」

「そのとおり」スクルージはさげんだ。「まったくそうだ。わたしも否定せんよ、ぜったいに」

「彼女は大人になって亡くなったが」精霊はつぶけた。「わたし思うには子供が何人かいたと思ったがな」

「一人」

「そうだ」精霊は言った。「あの甥だよ」

スクルージは心中おだやかでなかつたようだったが、短い答えをかえした。「そうだ」

その瞬間に二人はそうした人々をあとにして学校を離れ、街の人通りの激しい大通りにやってきた。その大通りでは影のよくな通行人が行き来をしており、影のような荷車や馬車が道をあらそつていた。そうした争いと騒ぎはまるで本当の街そのものだった。店のかざりをみれば、今が再びクリスマスの時期であることは明白だった。でももう夕方で、通りはライトアップされていた。

精霊は、一軒の店のまえで立ち止まり、スクルージにここを知っているかたずねた。

「知ってるかだつて」 スクルージはさげんだ。「わしはここで丁稚奉公してたんだ」

店にはいつていくと、ウェールズ風のかつらをつけた老人が高い机のむこうに座っているのが目に入った。もしもう二インチほど背が高かったら、天井に頭をぶつけたに違いない。スクルージは興奮して大声をだした。

「ああ、フェジウィッグさんだ。なんてことだ、フェジウィッグさんが生き返つた」

フェジウィッグはペンをおき、時計をみあげ、それは七時を指していた。両手をこすると、ゆつたりしたチョッキを止し、つまさきから慈悲を感じる部分までをふるわせ一人で思い出し笑いをした。そして耳に心地よい、テンポのいい、ふかみのある、豊かで楽しげな声で名前をよんだ。

「おーい、ネーザーや、ディックや」

昔のスクルージはもう若者になっていて、急いでいつしよの見習いと部屋にはいつてきた。

「確かにディック・ウイルキンだ」スクルージは精霊にささやいた。

「なんてことだ、そう、あいつに違いない。わしとどこに行くのでもいつしよだった。ディックだ、そうディックだ。ああ」

「さて、おまえたち」フェジウィッグは話しかけた。「今晚は仕事はおわり。クリスマスイブなものな、ディック。クリスマスだぞ、エベネーザー。店を閉めるんだ」フェジウィッグはぱんぱんと両手をたたきながら、声を大きくした。「いますぐだ」

そして見習二人がどんなふうに取りかかったかはみなさんには信じられないほどでしょう。通りに戸板をもってとびだし、

一、二、三、戸板をはめこみ、四、五、六、横木をわたし固定して、七、八、九、とみなさんが十二まで数え終わらないうちに競走馬のように息をきらしでもどつてきました。

「でかした」フェジウィッグはさけぶと、高い机からすばらしい身のこなしで飛び降りて、「片づけるんだ、ぼうやたち。ここにスペースをつくろう。そらそら、ディック。ほらほら、エベネーザー」

片づけ。フェジウィッグがみていて、片付かないもの、あるいは片づけられないものは何もなかった。すぐに片づけがおわり、動かせるものはまるで永遠にみんなの目前からなくなってしまうかのように片づけられた。床をはき水がまかれランプは調整され、暖炉には燃料がたつぷりくべられた。お店は、気持ちのいい暖かなすつきりとした輝くダンスルームになった。冬

の夜にはだれもが目にしたいと望むようなところだ。

そこに楽譜をもったフィドル奏者がやってきて高い机に陣取り、そこを音楽をかきならす場所として、五十人も胃が痙攣しているかのようにチューニングをした。満面に笑みをうかべたフェジウィツグ夫人がやってきて、三人の明るく愛らしいフェジウィツグの娘たち、娘たちに心を奪われた六人の若者たちもやってきた。召使もいとこのパン屋をつれてやってきた。コックは、兄の親友だという牛乳配達をつれてやってきた。わざわざやってきた男の子もいて、どうやら主人からは満足に食べさせてもらってないようだ。かれは隣の店の少女の影にかくれながらやってきて、ただその少女も店主に耳をひっぱられてやってきたことがわかったのだが。次から次へと人がやってきた。恥ずかしそうに入ってくるものもあれば堂々としているものも

いて、上品なものもあれば下品なものもいて、引つ張つてくるものがあるれば引つ張られてくるものもいた。とにもかくにも、みんながやつてきた。すぐに二十組の組み合わせができ手をとりあつて部屋を半分まわり、反対側を引き返してきた。部屋の真ん中まで行つては引き返してきて、仲の良いグループがさまざまな形でくるくるまわつて踊つていた。先頭のカップルはいつも間違つた場所で曲がついていつて、新しく先頭になつたカップルがその場所にくるとすぐに再び同じことを繰り返し、しまいは列の最後までばらばらになつてしまつた。そうなつたところで、フェジウィッグが手をうちならしてダンスを止めさせて、大声をあげた。「いいぞ」そしてフィドル奏者は火照つた顔を特別そのためにあつらえられた冷たい水にひたした。ただ休んでいられるかとばかりに、顔をあげ、すぐに再度演奏しはじ

めた。ただまだダンスをするものがいなかったので、まるで前のフィドル奏者がつかれはてて家に戸板にのせて連れて帰られ、次に新しい奏者が現れすっかり前の奏者に打克つか、死ぬまでがんばるといった具合だった。

ダンスはもつとつづき、罰金をとる遊びがあり、またダンスをやり、ケーキ、ニーガス酒、つめたいロースト肉とつめたい煮た肉がたっぷりあった。そしてクリスマスに食べるひき肉入りの小さなパイがあり、ビールがたっぷりあった。ただこの世の一番の見ものはローストや煮た肉のあとにやってきて、それはフィドル奏者（器用なやつで、あなたやわたしが命ずるまでもなく自分の仕事を心得てるやつらなんです）がサーロジャー・デ・カバリーをうちならしはじめたときだった。そしてフェジウィッグが夫人とダンスをはじめた、それもトップとしてで、

二人にとつてはずいぶんとやつかないダンスだったのだが。三組か四組そして二十組が進み出て、いずれもダンスに自信がある組で、歩くなんて思いもよらずいつもダンスをしている連中だ。

ただ倍の人数でも、いや四倍でも、フェジウィッグと夫人は立派にはりあえたことだろう。夫人もありとあらゆる点から、フェジウィッグの立派なパートナーだった。もしまだ誉めたりないというなら、もつといい誉め言葉を教えてもらえれば、それを使おう。フェジウィッグのふくらはぎからは火花がはつきりと出ているようで、ダンスとありとあらゆるところが月のように輝いていた。いつのどのときでも、次にどのようなダンスがくりひろげられるか予言することはできなかつただろう。フェジウィッグ夫妻はダンスを最後までおどり、前にでて下がり、両

手をパートナーとつないで、お辞儀をして、コークスクリューやスレッド・ザ・ニードルなんかをこなし、元の場所にもどつた。フェジウィッグはとつぜんダンスをとめた、ものすごく上手くとめたので、両足がウインクをして、まったくよろめくこともなく再び立つたように見えたくらいだった。

時計が十一時を知らせたとき、この内輪でのダンスはお開きになった。フェジウィッグ夫妻もドアの両側の位置に立ち、一人一人出て行くときに握手をかわし、メリークリスマスと声をかけた。二人の見習をのぞいて全ての人が帰つたときに、夫妻は二人にも同じように挨拶をした。そうぞうしい声も小さくなり、見習の二人も店の奥のカウンターの下のベッドへ入つた。そうしたあいだ中ずっと、スクルージは放心した男のようだった。心は見た見た光景の中に入り込み、その中の自分と一体になつ

ていた。すべてのことが本当だと確認し、すべてのことを思い出し、すべてのことを楽しみ、不思議な興奮を味わった。自分のすがたとディックの明るい顔がみえなくなつてはじめて、精霊のことを思い出し、精霊が頭の上にとても明るいあかりを灯しながら、自分のことをずつと見ていたことに気づいた。

「なんでもないことだな」精霊はつぶやいた。「こうしたつまらないやつらをどんなに喜ばせたつて」

「なんでもないだつて」とスクルージは繰り返した。

精霊はてぶりで二人の見習の言つてゐることに耳を傾けると合図した。二人は心からフェジウィッグのことを褒め称えているのだつた。それから精霊は言つた。

「どうだい、なんでもないことじゃないか。あの男はこの世でいうお金を数ポンド費やしたただけだろ。たぶん三、四ポンドといつ

たところだ。これほど褒め称えられるのに値することかい？」

「そうじゃない」スクルージはその言葉に頭に血がのぼり、まるで今の自分ではなく光景の中の自分であるかのように無意識に答えました。「そんなことじゃない、精霊さん。フェジウィツグさんはむしろを幸福にすることも不幸にすることもできるんだ。仕事を軽くすることもつらくすることも、楽しくすることも疲れるものにする 것도。その力が言葉や見かけにあるとしても、つまりささやかであまり重要でないので、加えたり、数えたりできないようなものの中にあるとしてもだ。フェジウィツグさんが与えてくれた幸福は、身代を費やすほどの価値があるものですよ」

スクルージは精霊の視線を感じて、立ち止まった。

「どうしたんだ」精霊はたずね、

「別に」とスクルージは答えた。

「どうかしているようだがね」精霊がいいはると、

「いや」と答え、こう続けた。「別になんでもないが、今ふつと自分の事務員にも一言か二言かけてやればよかつたと思つただけです」

スクルージがこの言葉を口にしたとき、光景の中の自分はランプを消した。スクルージと精霊はふたたび横に並んで外へと出て行つた。

「時間がない」精霊は早口でいうと「急げ」と続けた。

これはスクルージに向かつていつたのでも、目に見える誰に向けたというのでもなかつたが、すぐさま効果があつた。ふたたびスクルージは自分の姿を目にすることになつた。少し年をとり、青春をむかえていた。スクルージの顔には年をとつたと

きの厳格さや厳しい様子が見られなかったが、不安と貪欲さの兆候は見受けられた。目にはいきごんでいる貪欲さ、落ち着きのない様子があり、それはすつかり性格に根をおろした情熱を示しており、大きくなつていく木がその影を落とすだろうところでもあった。

一人ではなく、喪服をきた美しく若い娘がそばにこしかけていた。その目には涙があり、過去のクリスマスの精霊による光できらめいていた。

「なんでもないことだわ」娘は優しく口にした。「あなたにとつてはどうでもいいこと。他の幻想がわたしにとつてかわつただけですもの。もしわたしがそうしようとしてきたように、これからそれがあなたを勇気づけて喜ばせるなら、わたしが悲しむ理由はなにもないわ」

「どんな幻想が君にとってかわるっていうんだい」 スクルージは口をはさんだ。

「お金よ」

「それが世の中の公平な扱いというもんじやないのかな」 スクルージは続けた。「貧乏ほどつらいものがあるかい。豊かになろうと一生懸命になることほど否定しようとするのが難しいものはないな」

「あなたは世の中を恐れすぎているの」 娘はやさしく答えを返した。

「あなたのお金以外への希望はすべて、お金に関する非難をうけたくないという希望になってしまったんだわ。わたしはあなたの高いところをめざす大志がひとつひとつ無くなっていくのを目の当たりにしたもので、結局、儲けることだけでしょ、あ

あなたの心をしめているのは。そうじゃない」

「だからどうだっていうんだい」スクルージは答えた。「ぼくが年をとってそれだけ賢くなつたからといって、それがどうしたっていうんだよ。君に対する態度は変わらないじゃないか」

娘は頭をふつた。

「変わったとでもいうのかい」

「わたしたちの約束は昔のことだわ。貧しかったけど、それでも満足してたころのね。近い将来に一生懸命がんばればこの世の豊かさはすこしづつよくなっていくと思えたもの。あなたは変わったわ。変わって、別の人になつてしまつたの」

「ぼくは子供だつたんだよ」スクルージは我慢強くいつた。

「自分でも昔の自分ではないことは分かるでしょう」娘は答えた。「わたしにも分かるわ。二人の心がひとつだつたときに幸せ

を約束してくれたものは、心がばらばらになってしまった今となつては惨めなだけよ。どれくらいたくさん、そして真剣にわたしがこのことを考えたと思う？ 言いたくないけど。そのことを考えてあなたと別れるっていうだけで十分でしょう」

「ぼくが別れて欲しいって言ったかい」

「言葉の上では、たしかに言つてないわ」

「じゃあどうやって言つたんだい」

「性格が変わり、心が変わり、生活態度が変わつて、最後に目指す希望が変わつたことでよ。あなたがみて、わたしの愛をすこしでも価値がある貴重なものとしてくれた全てのことでも、そんなものがわたしたちの間になかったとしたら、」娘は、穏やかだがしつかりとスクリーンを見つづけた。「言葉にだして言つて、今わたしのことを探し求めてわたしの愛を勝ち取ろう」

とするかしら？　なんてことでしょう」

スクルージはその推測が当たっていることに我を忘れて屈し
そうに見えた。でもなんとか意思をふりしぼりこう答えた。「本
気でそう思ってるわけじゃないだろう？」

「もしそうならどんなに嬉しいことでしょう」娘はそう答える
と、「でも確かに心からそう思ってるの。わたしがこの事実をさ
とつたとき、この事実がいかに強いものであらがえないものな
のかを知りました。でももしあなたが今日も、明日も、昨日も
自由に行動できるとしたら、わたしはあなたが持参をもたな
い女を選ぶなんてことは信じられないわ。どんなに親しい仲で
も、なにより損得を大事にするあなたが。でも一時の気まぐれ
で自分の主義に反して、そういう女を選んだとしても、あとに
なつてぜつたいあなたが後悔してくやまないとはわたしには確

信できないの。いやあなたは絶対後悔するわ。わたしはあなたと別れてあげます。あなたのことを思って、あなたのかつての愛のために」

スクルージは口を開こうとしたが、娘の顔はスクルージを避けたままで、娘は続けた。

「あなたもこのことで心を痛めるかも。過去の記憶であなたがそうであつてほしいと思うけど。でもとてもとても短いあいだのこと。一円のお金にもならない夢として、そんな思い出は喜んですてるでしょうから。目がさめてよかつたと思つてね。どうかあなたの選んだ道でお幸せに」

娘はそういつてスクルージのもとを離れ、二人は別れた。

「精霊や」スクルージは言った。「これ以上見せんでくれ。家につれてかえつてくれ。こんなにわしを苦しめてうれしいかい？」

「もう一つだ」精霊は断言した。

「もういやだ」スクルージは声をあらげた。「もう十分だ。見たくない。もう見せないでくれ」

しかし容赦ない精霊はスクルージの両腕をつかみ、次に起こることへと目を向けさせた。

別の光景が目の前にはくりひろげられていて、ある部屋が、それほど大きくはないがきちんとしていて、快適そうな部屋があった。冬の暖炉の前には一人の美しい女性がこしかけていて、スクルージは女性の向かいにすわっている美しい母親の婦人を見るまでは、その女性が前にみていた女性と同一人物だと思つていたくらいだった。この部屋は騒々しく、スクルージの高ぶつた気持ちではかぞえられないほどの子供であふれていた。詩の中の有名な羊の群れとはちがつて、一つになって行動する四十

人ではなく、四十人がそれぞればらばらに行動するのだった。結果はといえば、信じられないくらい騒々しさということになろうか。ただ誰もそれを気にしている様子はなかったし、それどころか母も娘も心から笑顔をうかべており、とても楽しんでいた。娘の方は遊びの輪にくわわり、残虐にも山賊たちに略奪されてしまった。わたしもかれらにはなんでも呉れてやっただろう。ただあんなに乱暴にはしない、そう、決して。どんな富をつまれても、あのゆわえられた髪をくしゃくしゃにしたり、ほどいたりはしない。あの小さなかわいらしい靴ときたら、わたしなら決してむりやり脱がせたりはしない、ああなんてことだ、どんなことがあってもそうはしない。かれらがしたようにたわむれに彼女のウエストを測るなんて、ずうずうしい若造たちめ。わたしならそんなことは決してできない。そんなことを

しようものなら罰として腕が曲がったままになつて決してふたたびまっすぐになることはないだろう。で、本当のことを言え、わたしは彼女のくちびるにふれたかつたのだ。彼女にいろいろ聞いて、そのくちびるが開き、伏目がちな目がまばたきするのを見て、顔を赤くしたくなかつたのだ。髪をほどいて、その髪の毛のほんのちよつとでも値段がつけられないくらいのものである。そうわたしは、言わせてもらえば、いかにも子供の権利をもちながら、その価値を十分に知っているくらいの大人になりたかつたのだ。

でもノックの音がして、それにひきつづいてドアへすごい勢いで殺到し、彼女は笑つて着ているものはめちやくちやなままで、ドアに向かつてどつと押し寄せた騒々しい一団の真ん中にいた。まさしくお父さんの出迎えて、お父さんはクリスマスのおもちや

やプレゼントをたくさんかかえて家に帰ってきたところだった。そして大声があがりうばいあい起きて、無防備な荷物運びへといっせいに襲いかかった。椅子をつかってお父さんによじのぼり、ポケットをさぐるかと思えば、茶色の紙包みを奪い取り、ネクタイをひっぱり、くびまわりにしがみつき背中をたたき、元気一杯といったようすでお父さんの足をけりつけたりしていた。包みが開かれるたびに、驚きと喜びのさけび声にむかえられた。赤ちゃんがおもちやのフライパンを食べちゃったとか、それからおもちやの七面鳥を木のお皿ごと飲み込んだり、たみたいだなどという声があがった。これはすぐにぜんぶでたらめだつてことがわかってほっとしたが、歓喜と感謝と興奮があった。どれも表現できないほどだが、子供たちとその騒々しさが居間をでて、一段一段階段をのぼりベッドに行つて、ようやく

落ち着いたくらいとでも言えればいいだろうか。

スクルージは今までよりいつそう注意深くみていたが、この家の主人が娘がもたれかかるままにしながら、ゆつたりと奥さんといつしよに暖炉のそばに腰をおろしていた。そしてちょうどこんな娘が、優美で前途洋洋たる娘が、自分のことをお父さんなどと呼んでくれたら、自分の味気ない冬の人生の春のひとときとなるのにと考えていたら、視界が涙でうるんできた。

「ベル」主人は奥さんに笑顔で声をかけた。「今日の午後、君の幼馴染に会ったよ」

「誰かしら」

「あててごらん」

「わからないわ、えーつと、だめ、わからない」と一呼吸おいて、旦那さんといつしよに笑いながら「ああスクルージね」と

つけ加えた。

「そう、スクルージさんだよ。事務所の前を通りかかって、閉まってなくて中であかりを灯していたから、のぞきこまずにはいられなかったよ。かれの共同経営者は今にも死にそうだと聞いたけどね。一人きりで座ってたよ。まったくのひとりぼっちなんだろうと私は思うな」

「精霊さん」スクルージはしゃがれ声で頼んだ。「ここから帰してください」

「これらは全部過去の影だといったと思うが」精霊は答えた。「これがあるのままであつて、わたしに文句をいうのは筋違いだよ」

「帰してください」スクルージは声を大きくした。「わしには耐えられん」

スクルージは精霊の方をふりむくと、その顔にはいままで見
てきたようないろい로운顔の一部が奇妙にからみあっているよ
うに見えて、しばらく見つめあつた。

「ほつといてください、帰してください。これ以上わしにかま
わんでください」

こうしてもめていると、もし精霊それ自体にはなんら目に見
えるような抵抗せず、相手になんにもしていないのに、それが
もめているといえればだが、スクルージには精霊の光がいつそ
う明るくかがやくようにみえた。それが自分に与える影響と漠
然とむすびつけ、灯りをけすカバーをつかむととつぜん精霊の
あたまにそれをかぶせた。

精霊はその下にかくれ、カバーで体全体が隠れた。ただスク
ルージは全力でおさえつけたが、明かりを消すことはできなかつ

た。明かりはその下から切れ目ない光の洪水として地面にもれていた。

スクルージは自分がかれはてて、どうしようもなく眠気を感じた。それで自分が寝室にいることがわかった。カバーに最後の一押しをして、手が緩んだ。そしてベッドに倒れ込むかこまないうちに、深い眠りについた。

第三章 三人のうち二人目の精霊

大きな響くいびきをかいている最中にスクルージはとつぜん目をさまし、ベッドにこしかけて、頭をはつきりさせようとしたが、すぐに鐘がふたたび一時をしらせるのがわかった。まさしくいい時間に目がさめたものだと思った。というのは、ジェイコブ・マーレーの招きによる使者の二人目との会合をもつという特別な目的があつたのだから。ただこんどの精霊はどのカーテンをひいてでてくるのかと考え始めたらひどく寒気がしてきただので、自分の手であらかじめカーテンを片側に寄せてしまつて、ふたたび横になった。ただベッドのまわりを注意深く見回しながらだが。そう、精霊がでてきた瞬間からしつかり心構え

をしたいからで、不意をつかれて驚くようなことにはなりたくなつたのだ。

むとんちやくな種類の紳士というものは、抜け目がなくいつも時間にうるさいが、自分がコイントスから殺人にいたるまでありとあらゆることがこなせるのだといって、どんな冒険でもできる能力をほこるものである。なるほどたしかに、このコイントスと殺人のあいだには、ありとあらゆる物事がふくまれるといつていいだろう。スクールジがそれほどのことをするとは思わないが、わたしとしてはみなさんにスクールジが不思議な物事の内的大部分については覚悟ができていたと信じているといつてもかまわないと思う。赤ん坊からしかばねに至るまでの何がでてきても、それほどはスクールジをおどろかせないだろうということも。

さて、ほとんどありとあらゆることに覚悟ができていたが、スクルージは何も起きないということには準備が整っていなかった。鐘が一時をしらせても、何も姿をあらわすものはなかった。スクルージはひどい身震いを感じた。五分、十分、十五分がすぎたが、何も起こらなかつた。このあいだずっとスクルージはベッドに横たわつていて、炎のような赤みがかかつた光のまさに真ん中にいた。その光は時計が時間をしらせたときから拡がつたものである。ただの光だが、スクルージにはそれが何を意味しているのか、あるいはそもそも何かを意味するものなのか全くわからなかつたので、何十もの精霊よりずっと恐ろしいものに感じられた。ふと頭によぎつたのは、そうと分かればほつとできるのに、分からずに自分が自然発火現象のめずらしいケースに遭遇しているのではなどということだつた。ただ、とうと

う、わたしやみなさんなら最初に思い当たっただろうことに、スクルージも思い当たった。まあ当事者というものは、いつも何をしなければならぬのか、しなければならぬことが全く分からない状態にあるものだから。で、とうとうスクルージはこの不思議な光がきている源と秘密がとなりの部屋にあるらしいということに思い当たった。たどつていくと、そのあたりから光が発せられているようだった。この考えが心の全てを占めてしまい、スクルージはゆっくり起き上がると、スリッパをつっかけドアの方へとむかった。

スクルージの手がノブにかかった瞬間に、奇妙な声でスクルージの名が呼ばれ、中へとはいるように命じ、スクルージもそれにしたがった。

そこはまちがいなく自分の部屋だったが、驚くべき変化がも

たらされていた。壁や天井からは生き生きとした植物がたれさがり、まるで森の中のようにだった。いたるところで、きらきらと明るくかがやく木の実が光っていた。ひいらぎやヤドリギ、つたの生き生きとした葉っぱが光を反射し、まるで無数の鏡があちこちにばらまかれたかのようにだった。えんとつへは大きな炎がうねりをあげており、それはさええない石の暖炉がスクルージが住んでいるときにも、あるいはマーレーが住んでいたとき、冬の時期にもひさしくなかつたような勢いだった。床の上につみあげられていて、まるで王座を形作っているかのようにだったのは、七面鳥、がちょう、鳥獣、家禽、ブローン（訳注1）、大きな肉片、子豚、長い輪になったソーセージ、小さなパイ、プラムプディング、大量の牡蠣、焼いたクリ、真っ赤なりんご、新鮮なオレンジ、甘美なナシ、とても大きなクリスマスケーキ、そ

していろいろなものが入っているポンチ、それぞれのおいしそうな湯気が部屋を満たしていた。そしてこの大きな椅子のうえにゆつたりと、楽しげな巨人が腰をおろしていた。とても楽しげで、光り輝くたいまつを手にしていたが、それは豊穡の角に似てなくもなかった。そしてそれを高く掲げ、スクルージが部屋のドアから顔をのぞかせたとき、その顔を照らし出した。

「入って来い」精霊は声をかけた。「入ってきて、よく私を見るんだ」

スクルージはおずおずと入ってきて、顔をあげて精霊をみた。スクルージはもう以前のような強情な彼ではなかった。精霊の目は澄んでいて優しげだったが目をあわせることはできなかった。

「私は今のクリスマスの精霊だ」精霊は語った。「よく私をみる

んだ」

スクルージは敬意をはらって精霊を見た。緑色の上着というか外套を一枚はおつており、それは白い毛皮でふちどられていた。この服はあんまりゆつたりしていたので広々とした胸がはだけられており、それはまるでどんなものでもさえぎつたり隠したりできないとでもいうようだった。足は上着の大きなひだの下から姿をのぞかせておりやはりむきだしで、頭といえばヒイラギの冠のほかはなにもなく、その冠のあちこちにはつららが光っていた。黒い髪の毛はながくゆつたりとカールされていていた。そのゆつたりさ加減は、にこやかな表情、活気のある目、開いた手、華やいだ声、くつろいだ物腰や楽しそうな雰囲気に見られるものと同じだった。腰の周りには、アンティークなさやをぶらさげていたが、刀は入っておらず、その古いさやも錆び

だらけだった。

「私のようなものはみたことがないだろう」精霊は語りかけた。

「見たことがあります」スクルージはそれに答えた。

「私の一家の若者たちと一緒にぶらぶらしなかったかな？　と
いっても私が一番若いんだから、最近生まれた私の兄たちと
いうことだが」精霊はつづけた。

「なかつたように思いますが」スクルージは答えた。「なかつた
と思います。ご兄弟は多いんですかね、精霊さま」

「千八百人以上はいるかな」

「食わせていくのも大変ですな」スクルージはぶつぶつぶや
いた。

今のクリスマスの精霊は立ち上がった。

「精霊さま」従順にスクルージは口をひらいた。「どこへでもわ

しを連れて行ってください。昨晩はむりやりといった具合でしたが、今も胸にきざまれている教訓が得られました。今晚もなにかおしえてくださることがあるなら、よろしくおねがいします」

「私の上着にふれるんだ」

スクルージは言われたとおりにしっかりと上着をつかんだ。

セイヨウヒイラギ、赤い木の実、蔦、七面鳥、がちょう、鳥獣、家禽、ブローン、肉、豚、ソーセージ、牡蠣、パイ、プディング、フルーツ、ポンチはすべてただちに消え去った。そして部屋の暖炉の火、赤い光も消えてなくなり、時間も夜から、クリスマス朝になって街の街頭に二人はたちつくしていた。寒さがきびしく、人々はそうぞうしいがきびきびとした気持ちのいい音をたてて、自分たちの家の前や屋根の上の雪かきをして

いた。男の子にとつてみれば屋根から雪が下の道路にズシンと落ちて、自分が小さな雪嵐をおこせるのをみるのは何物にもかえがたい喜びでした。

屋根の上にもつた真つ白な一面の雪や、地面にもつたそれよりは汚れた雪とくらべても家や窓はくろずんでみえた。地上に積もつた雪には馬車や荷馬車の車輪で深いわだちができていた。わだちは大きな通りが交差するところでは、何百となく交差しており、いりくんだ経路になつていて、黄色っぽい厚いどろや氷で跡をたどるのはむずかしくなつていた。天候もさえず、みじかい通りでさえどんよりした霧がはんぶん溶けてはんぶん凍つていて、息苦しくなりそうだった。その霧の重い粒がすすのシャワーとなつてふりそそぎ、まるでイギリス中の煙突がそろつて火をつけ、思う存分すすをはきだしているといった

具合だった。天候にも街のようすにも心がうきたつようなところはどこもなかったが、それでもすみきつた夏の大气やすすがすがしい夏の太陽がどれほどかきたてようとしてもできないような楽しい夏な雰囲気が街じゆうにただよっていた。

その理由はといえば、家の屋根の上で雪かきをやっている人たちが陽気で歓声をこれでもかと上げていたからだ。屋根のへのりのところからお互いに話しかけたり、ときどきは口で言う冗談よりもよつぽど楽しい口撃である、雪合戦をやり、あつたといつては心から楽しそう、あたらなかつたといつては残念そうにしていた。七面鳥をあつかう店はもう半分開業休店状態だったが、一方果物をあつかう店はかなりにぎわっていた。形がまるで陽気な老紳士のチョッキのような、大きくまんまるでだるま型のクリが入った籠があり、ドアのところにもたれかかつて

いたり、ふくれすぎて表にまで転がったりしているものがあつた。色つやのいい、茶色のまんまるとしたスペインタマネギがあり、その肥え具合はスペイン修道士さながらで、とおりすぎる女性たちにいやらしい目つきで棚の上からウインクしてみせたり、おどおどとつるされてるヤドリギの方をみつめたりしていた。なしとりんごも巨大なピラミッドのようにつみあげられ、とおりがかりの人たちの渴きを潤すようにとの店主の寛大さでぶどうが人目につくようにぶらさげてあつた。こけのついたい色のハシバミの実も山とつまれていて、その香りはくるぶしまで落ち葉にうもれながら歩いた楽しい散歩を思い起こさせた。ノーフォーク産りんごもとれたてでよく日に焼けていて、オレンジやレモンの色合いを補ったり、ひきしまったジューシーさで、どうか紙袋でお持ち帰りいただいて夕食後に召し上がって

くださいと懇願しているかのようだった。金魚や銀色の魚がこうしたフルーツのあいだの金魚鉢にいれられて飾られていたが、こうした頭のにぶく血の巡りのわるい連中にも何がおきているのかわかっているように思われた。魚たちもゆつくり興奮を表にださず、その小さな世界を息もたえだえに回遊していた。

食料品屋、ええ食料品屋は、シャッターを一、二枚ほどおろしほぼ店を閉めかけていましたが、開いている場所は盛況なものでした。カウンターの上で天秤皿が陽気な音をたてているだけではなく、糸と滑車は天秤皿をいきおいよく動かし、おかげでジャグリングでもしているかのように天秤皿は上下してしました。紅茶とコーヒーの香りが鼻をつき、レーズンは極上のもものがたつぷりあり、アーモンドはこれでもかというほどまつしろでシナモンはまつすぐで長く、その他の香辛料もとても香ばし

そうだった。砂糖漬けの果物が溶けた砂糖でしつかりかためられ、それにはいかなるそつけない見物人でも気が遠くなり、しまいにはおこりつぽくなるほどだった。またいちじくは汁気が多く熟れていて、フランス産のプラムは赤みがかつて、適度なすっぱさで箱の中にきれいに陳列されており、なにもかもが食べごろでクリスマスのよそおいをしていた。ただお客さんたちはみなこの日にうかれせかせかして我先にとほしがり、ドアのところでおしありへしあいをやり、買い物かごをひどくぶつけあうは、カウンターの上面に買い物忘れてまた急いで取りにもどるなど、そういった間違いを数限りなくこれ以上ないほど上機嫌で繰り返すのだった。一方食料品屋の店員たちはあまりに機嫌よく生き生きとしており、エプロンを後ろでとめている心臓の形をしたかざりは、まるでみんなに見てもらいたいか

のようで、自分たちの心臓をクリスマスのコクマルカラスがほじくりかえしたとでもいうかのようだった。

しかしまもなく協会の尖塔の鐘が教会や礼拝堂へと善良な人々を呼び集め、みんなせいっぱい着飾って通りへとあふれ、その顔も喜びにあふれていた。それと同時にありとあらゆる横道、路地、名前もついてないような曲がり角から大勢の人が、みずからの夕食を手にパン屋へと姿をあらわした。そういつた貧しい人々のどんちゃんさわぎはいたく精霊の興味をひいたようだった。というのは精霊はスクールジとともにパン屋の入り口に立ち、食事を運ぶものがパン屋を通り過ぎるときにその覆いをとると、カンテラから夕食へと香料をふりかけたからだだった。たいまつはふつうのものとは全く違ったもので、一度ならず二度、夕食を運んでいるものがおしあいへしあいで怒号がとびかうと、

カンテラから数滴しずくをふりかけるだけですぐに騒ぎはしずまった。そしてかれらは口々にクリスマスに喧嘩なんて恥ずかしいにもほどがある、と話すのだった。たしかにその通りだった。神もまったくさうであることを望んだにちがいない。

そのうちベルがなりやみ、パン屋も店を閉めた。ただ運ばれていた夕食の前方や料理の進む先にはあたたかい影のようなものがあり、パン屋のオーブンの上で水が蒸発するように、舗道の上で石が調理されたかのように湯気をあげていたのだ。

「カンテラからふりかけていたのは特別な香料ですか」スクルージは尋ねた。

「ああそうだよ、私の香りだよ」

「今日のどんな料理にも合うんですか？」

「どんな種類でも。とくに貧しいものの食事にはね」

「なぜ貧しいものの食事に合うんでしょう？」

「いちばん必要としているからだよ」

「精霊さま、」 スクルージはしばし黙り込んだあと続けた「なんだってわたしたちの世の中のすべての存在のなかで、あなたがそうした貧しい人々のむじやきな喜びの機会をうばうたいとおもっているのか、わたしには全く不思議です」

「わたしがかい」 精霊は声を大きくした。

「あなたは七日おきに貧しい人々が夕食を得る手段をうばつてるじゃありませんか。とくにこういつた夕食が必要な日に」 スクルージは言った「そうじゃありませんか」

「わたしがかい」 精霊は繰り返した。

「あなたがこうした場所を七日おきに閉めるようにしてますよね」 スクルージは続けた「だから結局同じことになるんじゃないや

いでしょうか」

「わたしがかい」精霊はさげんだ

「間違つていればお許しください。ただあなたの名のもとや少なくとも同じようなもの名のもとでそういうことが行われてきているのです」

「たしかにおまえたちの世の中ではそういうこともあるようだ」
精霊は答えた。「わたしのことを知つてると声を大きくしながら、自分の欲望やプライド、悪意、憎悪、ねたみ、偏見、身勝手さをわたしの名のもとに行うが、それはまったく存在したことがなかったようなもので、わたしやわたしの知つてるものか
らしてみれば、全くなじみがないものなんだ。それをおぼえておいてくれ、やつらの行為は全くもつてやつらのせい、わたしたちのせいではないよ」

スクルージはそうすることを約束し、二人は先をいそいだ。前といっしよで姿はみえなかつたが、街の郊外へと足をふみいれた。精霊のすばらしい能力で（スクルージはすでにパン屋で目にしていたが）それほどの巨体にもかかわらず、どこにいてもさして苦もなく体をあわせ、天井の低い屋根の下でも、まるで天井の高いホールでそうしているように、摩訶不思議な存在として優雅に立ち振る舞うことが可能だつた。

だからたぶん善なる精霊がまつすぐスクルージの店員の家へといそいだのは、こうした能力をみせつけるのが楽しかつたからか、あるいはやさしい、親切な、心温まる性根、そして貧しいすべての人々への共感のせいだつたのだろう。精霊は道をいそぎ、スクルージは精霊のローブをつかみ同行していた。そしてドアの戸口のところで微笑み、立ち止まってボブ・クラチェツ

トの住まいをカンテラからのしずくで祝した。考えても見れば、ボブは自身週に十五ボブ（シリングの俗称）をえるにすぎなかつた。毎土曜日に自分と同じ名前ものを十五枚手に入れるわけだ。現在のクリスマスの精霊は、かれの四つの部屋の家を祝福したのだった。

それからクラチエツトと妻はたちあがり、妻は二回は裏表にしたガウンを羽織つて、それはみすばらしいものだったがりボンをつけ飾っていた。リボンも安物だったが、六ペンスにしてはみばえがよかつた。同じようにリボンでかざりたてていた二番目の娘のベリンダ・クラチエツトの助けをかりテーブルクロスを拡げると、そのとき息子の子息のピーター・クラチエツトはじやがいもを煮ていた鍋の中にフォークをつきたて、ぶかつこうなシャツの襟の両端をくわえながら（そのシャツはもともとはボ

ブの持ち物だったが、クリスマスのお祝いとして息子にして後継ぎへと譲り渡されたものだ)、きちんと礼装したのが自分ながらにうれしくて、友達の集まる公園に行つてリネンのシャツの襟をみせびらかしたくてたまらなかつた。そこへ弟と妹がパン屋の外で七面鳥のにおいをかいだと騒ぎ立て、それが自分たちのだと知つて、いそいで駆け込んできた。ぜいたくなサルビヤやたまねぎが食べられると思つて、子供たちはテーブルの周りで踊り、大いにピーター・クラチエツトをほめそやした。ピーター・クラチエツトは別に誇らしげではなく、襟で首をきつくしめられ窒息しそうになっていたが、ゆつくり煮えるじやがいもが外にだしてくれ、外をのぞかせてくれとふたをたたいて煮あがるまで、火を吹いておこしていた。

「お父様はどうしたんだらうね？」クラチエツト夫人は話しか

けた。「それにおまえの弟のちびつこのトム。それにマーサは去年のクリスマスは三十分も遅れなかったのにねえ」

「マーサがきたよ」妹が姿をみせ教えてくれました。

「マーサがきたぜ」二人の男の子たちがさげびました。「ほーら、七面鳥だよ、マーサ」

「ほら、よくかえつてきたね、おまえ、なんだってこんなに遅かったんだい」母親はそういうと、十回は娘にキスをして、シヨールや帽子をぬがすのおせっかいてつだった。

「昨晚で終わらせなきゃいけない仕事は山ほど」娘は答えた。「それを今朝までに片付けなきゃいけないかったわけ、お母さん」「はいはい、来てくれたんだからもう気にしないわ」母親は答えると「暖炉の前におかけなさい、あつたまるのよ」

「だめ、だめ、お父さんが帰つてきたよ」いたるところに姿を

あらわす男の子二人組がそうさげぶと「隠れて、マーサ、隠れなよ」

マーサが隠れると同時に、ふきをのぞいて少なくとも三フィートは襟巻きを前にたらしながら小さなボブが帰ってきた。着古した服はつぎはぎだらけだが、クリスマスにふさわしくよくブラシがかかっていた。ちびっこタイムは肩車してもらっていた。かわいそうに、小さな義足をつけていて、両足を鉄製の器具で支えていた。

「おい、マーサはどこだい」ボブ・クラチエツトは、あたりをみまわしながら声を大きくした。

「まだ帰つてこないのよ」とクラチエツト夫人は答えた。

「まだだつて」ボブは、高揚していた気分がすっかり落ち込んだというように言った。じっさいのところ教会からの道すがら

ずつとティムを肩車し、息せき切つて家にかえつてきたのだつた。「クリスマスだというのにまだ帰つてきてないんだ」

マーサは、冗談にせよ父親ががっかりしているところを見ていられなかつたので、クローゼットのドアの陰から早々に姿をあらわし、父親の胸にとびこんでいった。そうこうしているあいだに二人の息子はちびっこティムを急かして、プディングが蒸されている音を聞かせるために台所につれていった。

「ティムはどうでした？」クラチエツト夫人は、夫がだまされやすいのをひやかしながら言った。ボブは娘をだきしめてすっかり満足していた。

「それはもうすばらしかった」ボブはそう言う。「よかったよ。あんなに長く一人きりでこしかけていたから考え込んだんだな。思いもつかないことを考えてた。帰り道で私に言ったんだ。教

会でみんなに自分のことをみてほしいと思つたつてね。その理由がふるつて、あいつは足が不自由だろ、だからみんながクリスマスに足が不自由な人が歩けるようになって、目が見えない人が見えるようになったつていうのを思い出してくれれば、幸せな気分になるんじゃないかつていうんだ」と続けた。

ボブの声は話しながら震え、そしてちびっこタイムが元気でたくましく育つているといつたときにはその声はもつと震えた。

床に義足のおとがコツコツと響き、次の言葉をもらす前にちびっこタイムが兄と妹につきそわれて暖炉のまえの椅子にもどつてきた。その間に、ボブは袖口をまくりあげ、ああその袖口のみじめなこと、あんなにぼろぼろになるものだろうか、ジンとレモンをまぜて体の温まる飲み物をつくり、よくまぜ、ぐつぐつ煮るために暖炉のわきに置いた。ピーターとどこにでも顔を

だす二人の兄弟は七面鳥をとりいき、すぐに興奮したあしどりでもどつてきた。

そうした騒ぎをみると、七面鳥があらゆる鳥のなかでもっとも貴重なものだと思うほどだ。羽の生え方、それは黒い白鳥も同然で、この家にはありうべかざるものだった。クラチエツト夫人はグレイビーソース(ちいさなシチュー鍋で前もつてつくつておいたもの)を煮立たせ、ピーターはこれでもかといわんばかりの力でマッシュドポテトをつくり、ベリンダはアップルソースを甘く煮詰めた。マーサは暖かくしたお皿をふき、ボブはちびっこティムをテーブルのすみの自分の横にすわらせた。二人組みの兄弟は自分たちもふくめたみんなの席を準備し、くちいっばいにスプーンをほおぼりながら自分たちの場所を見張っていた。つまりじぶんたちの番がくる前に七面鳥がほしくてさげびごえ

をあげないようにというわけだ。とうとうすべてのお皿がでろい、お祈りの言葉もおわった。一瞬の間のこと、クラチェツト夫人が肉切用のナイフをゆつくりみまわし、胸のところを開こうとした。ただじつさいに開いて、待ち焦がれた内の詰め物がでてきたときには、まわりからいつせいに歓声があがり、ちびっこティムでさえ、例の二人組に興奮させられて、ナイフをつかんでテーブルをたたき、か弱い声で万歳とさげんだりした。

かつてないほどの七面鳥だった。ボブは、こんなふうにするばらしく料理された七面鳥は見たことがないと口にした。そのやわらかさ、香りといい、大きさ、値段といいどこをとつても非のうちどころ一つなかった。アップルソースがかかり、マッシュユドポテトがそえられ、一家全員にじゅうぶん過ぎるほどの量の夕食だった。とくにクラチェツト夫人が感極まつていったのは

(お皿の上の小さな骨のひとかけらをみやりながら)、とうとうそれを全部食べきらなかつたということだ。ただ全員がおなかいっぱい、ちびつこにいたつてはのどの上までセージとたまねぎがつまつてゐる勢いだった。そこでベリンダがお皿をかえ、クラチエツト夫人は部屋を一人で離れた。プディングをもつてくるのを見守られるにはあまりに神経質になりすぎていたのだ。上手くできていなかつたら、ひっくりかえすときにくずれてしまつたら。裏の塀をのりこえてきて誰かが盗んでいつたら。そうみんなが七面鳥に夢中になつてゐるときに。そうしたことを考えるとクラチエツトの二人組にはかつかとしてならなかつた。ただそうしたありとあらゆる種類の恐怖があたまにうかんでくるのだつた。

うあー、すごい蒸気。プディングは鍋から出され、洗濯をし

たときのような香りがした。服の香りであり、食べ物屋とお菓
子屋がとなりあわせになつていて、さらにその隣に洗濯屋があ
るような香りだった。プディングのおでました。すぐさまクラ
チェット夫人が入つてきて、顔をまつかにしていたただそこには誇
らしげな笑みがみてとれ、プディングをはこんできた。そう、
ほんの少しのブランデーで火がつき、クリスマスのひいらぎが
一番上にかざられている、まるでまだらの砲弾のたまのよう
にしっかりとがっちりしたプディングが運ばれてきた。

ああ、なんてすばらしいプディングなんだ。ボブは思わず感嘆
して口にした。結婚してからまちがいなく一番の出来のプディ
ングだと。夫人も心の重荷がとれたといい、じつは粉の量が心
配だったのと口にさえした。だれもがそれについてとやかく口
にしたが、こんなに大家族にしては小さなプディングだと口に

したり、ちらつと考えたりするものはこの家族にはいかなかった。そんなことをしようものなら、すっかり家族のつまはじきものだ。そんなことをほのめかすだけでクラチエツト家の人なら顔を赤らめてしまふだろう。

とうとう夕食は終わった。テーブルクロスも片付けられ、暖炉も掃除し、火がおこされた。カクテルは味見をしてみるとすばらしく、りんごとオレンジがテーブルの上に、山ほどのクリが暖炉の上におかれた。それから家族全員で暖炉を囲み、ボブにいわせればそれは丸く囲むということだったが、じつさいには半円を意味していた。そしてボブクラチエツトのひじのところに、一家中のガラス容器、二つのタンブラーと取っ手のないカスタードコップが飾られていた。

こうした容器に、まるでそれらが黄金のゴブレットであるか

のように、温かいカクテルが注がれた。ボブはそれを笑顔でやりとげ、そのあいだも暖炉の火にかかったクリはパチパチと音をたてていた。そしてボブが口にした。

「メリークリスマス、神のご加護がみなにありますように」
家族全員が復唱した。

「神のご加護がみなにありますように」と一番最後にちびっこタイムが言った。

タイムは父親の一番近くの小さな椅子にこしかけていて、まるで愛していてずっとそばにおいておきたいのに、誰かが引き離すのではないかと恐れているかのように、ボブはその力のない小さな手をにぎりしめていた。

「精霊さま」スクルージは前には決して考えもしなかった興味をもつてたずねた。「あのちびっこタイムは生き延びれるので

しょうか教えてください」

「わたしには空になつた椅子が見えるな」精霊は答えた。「あの貧素な煙突の隅のところにな。それから使うものがいなくなつた義足が大事にとつてある。もしこうしたものが将来もかわらないままなら、あの子供はなくなることになるだろう」

「だめです、だめです」スクルージは続けた「ああ、なんてことだ。慈悲深い精霊さま、あの子を助けてやってください」

「ああしたものが将来かわらないなら、わしの種族のものとしても」精霊は答えた。「あの子を救うことはできないな。それがどうしたというんだ。もしあの子がしにたきやそうするがいいだろう。過剰な人口がへらせるじゃないか」

スクルージは自分のことばを精霊がつかつたのを聞いてうなだれて、懺悔と悲しみの念にふかくうたれた。「おまえ」精霊は

語りかけた「もしおまえに人間らしい心があるなら、石のような心でなければ、あんなことを口にするべきじゃない。過剰つていうのがなにか、それがどこにあるのかを見るまではな。おまえがどの人間が生き残つて、どの人間が死ぬのかを決めるつもりかい？ 神にしてみれば、おまえなんかあの小さな貧しい子のような何百万の人たちとくらべたら、より取るに足らない存在だし、生きるに値しないものかもしれないな。ああ神よ。葉の上の虫けらが、地面の上にはあまりに多くの飢えた仲間たちがたくさんいすぎるなんて言うのを聞こうとは」

スクルージは精霊の叱責のまえで頭をたれていて、視線をおとしていた。ただ自分の名前がよばれるといそいで頭をあげた。「スクルージさん」ボブは言った「このごちそうの源であるスクルージさんのために祈ります」

「このごちそうの源だつてねえ」クラチエツト夫人は顔を真っ赤にしてさげんだ。「ここにつれてきてみたいもんだよ。小言の一つでもお見舞いしてやるんだけどね、それを堪能してくれるといいんだけど」

「おまえ」ボブは言った「子供たちがいるし、クリスマスじゃないか」

「たしかにクリスマスなんでしょうよ」

「あんな嫌らしくてけちな上に人情のかけらもありやしないスクルージみたいなやつにも乾杯するんですもの。どんなやつかロバート、あなたが一番よく知ってるじゃないの、かわいそうに」

「おまえ、」ボブは優しい声で答えました。「クリスマスじゃないか」

「あなたのためとクリスマスに乾杯しましょう」夫人は言った。「スクルージさんのためじゃないわ、せいぜい長生きするといいわ。メリークリスマス、それに新年おめでとう。スクルージさんも楽しいでしょうし、きつと幸せにちがいないわ、まちがいはなくね」

子供たちも母親にならって乾杯した。今までの行動で心がこもっていないのはこの乾杯だけだった。ちびっこトムも最後に乾杯したが、かれにとってはそんなのは知ったことじゃなかった。スクルージは一家の蛇蝎のごとき存在で、その名前を口にただすだけでも一家だんらんには暗い一筋の影がなげかけられるほどだし、それもまるまる五分というものその影は消えることはなかった。

その影が消え去ると、みなは不吉なスクルージのことが片付

いたので以前よりも十倍は陽気になり、ボブ・クラチエツトは自分の見立てではピーターにはもし職についたら週に五から六ペンスはかせぐだろうとぶちあげた。双子のクラチエツトはピーターがお金を稼ぐだなんてことに大うけだった。ピーター自身ときたら、その途方もない収入を手にしたらどんな投資でもしてやろうかと入念に考えているかのようにつめつめの間から暖炉をみつめていた。それから帽子屋で見習をしているマーサがみんなにどんな仕事をしなきゃならないのか、やすまず何時間働かなきゃいけないのか、明日は家で休みだから朝はゆつくりとベッドで過ごすんだなどということ話を話し始めた。それから数日前に伯爵夫人と伯爵をみたんだけど、伯爵の背丈ときたらピーターとまったく同じくらいだったことを話した。するとピーターは襟をひときわたくあげたので、その顔はすっかり襟にかくれ

てしまうほどだった。こうしているあいだも栗と容器はみな
あいだをくるくると廻っていて、そのうちちびつこトムが雪の
なかを一人うろつく迷子の歌を歌い始めた。ちびつこトムとき
たらその歌をも悲しげな小さな声で歌い、とつてもうまく歌
い上げ、みんなはそれにききほれた。

こういった一連のことにこれといって特筆すべきことがあつ
たわけではない。見栄えのいい立派な家族とはいえなかつたし、
着ているものもすばらしいとはいえなかつた。靴は穴があいて
いたし、服もみすばらしく、ピーターはおそらくというかたぶ
ん質屋のこともよく知っていたことだろう。ただ一家は幸せで、
思いやりの心をもっていて、お互いに楽しんでいて、今を満喫
していた。そしてだんだんかれらの姿がかすんでいき、ただ別
れにおいても精霊のたいまつの明るい光でいつそう幸せそうに

みえるのを、スクルージはまばたきもせず見つめていて、とくにその視線はちびつこトムに最後まで釘付けだった。

このときにはすでにあたりは暗くなつていて、雪もはげしくなつていた。スクルージと精霊は通りをすすんでいたが、台所や客間やそういつた部屋からもれる明かりの明るさといつたらすばらしかつた。こちらでは、きらきらした明かりが温かなご馳走が用意されているのを示して、そこには暖炉の前ですつかり熱くなつたお皿や、寒さ暗さはだんこお断りとでもいうようにきつちり閉められた深紅のカーテンがうかがえた。あちらでは家中の子供が雪の中を外にかけだして、結婚した兄弟姉妹そして従兄弟、叔父叔母をわれさきに出迎えようとしていた。そしてまたこちらでは窓のブラインドのところにお客が集まっている影がうつり、そしてフードをかぶり毛皮のブーツをはい

た綺麗どころのグループでみんながいつせいにおしやべりしながら、足取りも軽くどこか近所の家をたずねていった。ああかわいそうな独身の男は、手練手管を心得た魔女たちがまつかな顔をして家に入ってくるのを目にしてしまうのだった。

楽しげな集まりを目指して通りにでている人の数から考えると、目的の家でまちうけたり、煙突の半分までたきぎをつみあげて歓迎してくれものは一人もないように思えるほどだった。みんなに幸あれ、そして精霊がよろこんだこと。どれほど胸をはだけ、大きな手のひらをひろげ、宙にうき、慈悲深い手で届く範囲すべてのものに明るく無邪気な喜びをばらまいたことだろう。先をいそいでいた街灯に火をともし、薄暗い通りに明かりをつける点灯夫できえ、夜のために一張羅をはおっていたが、精霊がとおりすぎるときには大きな声をあげて笑ったものだった。

た。点灯夫はクリスマスにいつしよに明かりをとすものがないなんて思いもよらなかつただろうが。

そして精霊からは一言も警告がなかつたが、二人はまるで巨人の墓地のようにばかでかい石のかたまりがあちこちに点在している寒々とした不毛の荒地にやってきた。水は傾いているありとあらゆるところに広がっていた、というかもし凍っていたなかつたらきつとそうなっていたことだろう。こけとシダそれから雑草が生い茂っている以外はなにも見当たらなかつた。西の方には一筋の真つ赤な閃光を残して夕陽がしずんでいき、荒野を少しの間まるで不機嫌でもあるかのようににらみつけ、いつそうどんだん不機嫌さをましていくかのようだった。とうとうまつくらな夜の濃い闇のなかに姿を消していった。

「ここはどこです」 スクルージは尋ねた。

「坑夫たちのいる場所だ、かれらは地底の奥底で働いているんだ」精霊は答えた。「ただ坑夫たちで私のことを知ってるぞ！ほらみろ」

一軒の小屋の窓から一筋の灯りが差し、二人はいそいでそちらのほうへと進んでいった。泥と石の壁を通り抜けると、もえさかる炎のまわりに愉快な一団が集まっているのが目に入った。一組の爺やと婆や、その子供たち、孫たちやその子供たち全員が、祝日用の衣装でかざりたてていた。爺やは不毛の荒地をふきすさぶ風の音にかき消されてしまうような声でクリスマスソングをうたっていた。子供の頃から歌つているとても昔の歌で、ときどきみながコーラスに加わった。みなが声をはりあげると、爺やも心が浮き立ち声をはりあげた。ただみなが歌うのをやめると、爺やの元気も失せてしまうのだった。

精霊はこの場所でぐずぐずしたりはしなかった。ただスクルージに自分の上着にしっかりつかまつているように命ずると、荒野の上を通り過ぎていった。どこへ急いでいたのか？ 海だらうか？ そう海へだ。スクルージが恐れおののいたように、ふりかえると、陸地の端がみてとれ、恐ろしい岩場をあとにしていた。あたりには水のたけ狂う音しか聞こえず、それはまるで吼えさかかっていて、うがった恐ろしい洞窟の中で荒れ狂い、地球を削り取ろうとせんばかりの勢いだった。

海の底深くの岩々の不吉な岩礁の上には、岸から数マイルばかり一年をとおして波がよせては崩れるところに灯台がひとつ建っていた。その土台には海藻が何層にもつまかさなり、海藻が海から生まれたように海鳥たちはまるで海藻から生まれたかのように、波をかすめとるかのように灯台のあたりを上昇した

り下降したりしていた。

しかしこの場所でも灯台を見守っていた二人の男が火をおこしていた。その火は厚い石壁の灯台の小窓から恐ろしい海へと一筋の光をはなっていた。ごつごつした手をすわっていた粗末なテーブルの上で組みながら、おたがいにラム酒で乾杯しながらクリスマスを祝っていた。年長の方が、まるで荒れた天候で古い船の船首像がぼろぼろになっっているかのような顔で、まるで強風そのもののようなふうずな歌をがなりたてた。

ふたたび精霊は暗く重苦しい海の上をどンドン進んでいった。スクールジに言ったところによればどの岸からもあまりに離れていたの、船の上に降り立った。二人は操舵手、船首の見張り役、監視をしている船長の横にいらんだ。彼らの姿は暗く、それぞれの持ち場での姿はまるで幽霊のようだったが、だれも

がクリスマスのメロディーをくちずさむか、クリスマスのことを考えており、あるいは昔のクリスマスの話を、そこには故郷に帰りたいという希望がともなっていたが、仲間になんげでささやいていた。甲板のだれもが、歩いていても寝ていても、良き者も悪しき者も、一年のどの日とくらべてもその日には優しい言葉を他人にかけていた。そしていくぶんかはおまつり気分をあげわかっていて、遠くにいる気にかけている人たちのことを思い出し、その人たちが自分のことをよろこんで思い出してくれていることを分かっていた。

スクルージがとてもおどろいたことに、風の唸り声をきいたり、どこかもわからないまるで地獄とおなじくらい深遠な奈の果てのさびしい暗闇を航海するなどという陰鬱なことを考えていても、まったくスクルージがおどろいたことに、心からの笑

い声をきくことがあるのだ。その声が自分の甥の声で、きれいでさつぱりした明るい部屋にその姿をみとめたときはなおさらいつそうスクルージは驚いてしまった。精霊はそのよこで微笑んで立っており、満足げな優しきをもつて同じ甥を見つめていた。

「はっはっは」スクルージの甥は笑い声をたてた。「はっはっは」もしたまたまであつても、ありそうにないことだが、スクルージの甥よりも笑いに恵まれている男をしつていたなら、わたしがいいたいことは一つだけ、そうその人となんとしても知り合いたい、お近づきになりたいものだ。ぜひ私にも紹介してもらいたい、お近づきになりたいものだ。

病気や悲しみが感染するように、笑いやユーモアもいやおうなしに感染するものだということはこの世の公正にて、公平、厳

然たる事実である。そしてスクルージの甥がこのように腹を抱えて、七転八倒し、顔をこれ以上ないといった具合でゆがめて笑えば、妻であるスクルージの姪も心から笑うのだった。そして集まった友人たちもまったくそれに遅れをとらず、いっしょに大きな笑い声をあげた。

「はっはっはっはっは」

「言うにはクリスマスはたわごとだつて、驚いたね」スクルージの甥はさげびました。「それを信じてるつて言うんだから」

「叔父さんのことをもつと恥ずかしくおもうべきだわ、フレッド」スクルージの姪は憤然といいはなつた。こうした女性を許してください。何事もいいかげんにしておくことはできなく、いたつてまじめなのだ。

彼女は美しく、それもとびぬけて美しかった。えくぼが一つ

あり、あつけにとられるほど美しく、すばらしく綺麗な顔で、真つ赤な小さな口があり、それはまるでキスするために作られたかのようにだった、それはまた疑いようのない事実だったのだが。あごのあたりには小さな斑点がいくつかあったが、わらうと一つになってしまふかのようにだった。また見たこともないよくなすてきな目がついていて、全体としてみればまったく癩にさわるほどだと言いたくなるような、ただそれはもちろん申し分ない存在ということだった。

「こつけないな老人だよね」甥はこうもらした。「それは本当のことでだし、もつと楽しくできると思うんだけど。でも自業自得ではあるし、僕には特にこれといつていいいたいこともないな」

「お金持ちなことは確かでしょ、フレッド」スクルージの姪は助け舟をだした。「少なくともいつも私にそういつてるじゃない」

「それがどうしたんだい、君」甥は答えた。「富があつても何の役にも立たないんだからねえ。富があつても自分自身でだつて心地よさそうじゃないし、ぼくらによくしよう、はっはっは、と考へてもこれっぽっちも満足しないんだらうよ」

「我慢できないわ」姪は断言した。姪の姉妹たちもその他の女性陣もまったく同意見だつた。

「それでもないな」甥も答えた。「かわいそうには思わないかい。僕は怒りたくても怒れないんだよな。だつて意地が悪いといつても誰が困つてるんだい？ いつも自分自身じゃないか。さて、叔父さんは僕らのことを嫌いだと思ひ込む、ここにきて僕らと一緒に夕食を食べたくくない。で、どうだというんだい？ たいしたご馳走を食べそこなうわけじゃない」

「いいえ、じつさいのところたいしたご馳走を食べそこなうん

だわ」姪はさえぎり、全員がそれに賛同した。いま夕食をたべおわったばかりで、テーブルにデザートがあり、暖炉のまわりのランプのそばに集まっていたところだから適切な判断をくだす資格があつただろう。

「それを聞けてうれしいよ」甥はそう口にした。「なんとっても近頃の若い主婦にはあまり信用がおけないものな、どうだいトツパー君？」

トツパーはあきらかにスクールジの姪の姉妹の一人に目をつけていたようだった。というのも独身はそうした話題には口をはさむ資格のない悲しい存在だよと逃げをうった答えをかえしたからだ。そうするとスクールジの姪の姉妹でバラをさしたほうではなく、レースの衣装をまとったふつくらしたほうは顔をまっかにした。

「つづけなさいよ、フレッド」と姪は両手を叩いてあおった。「言い始めたことは最後まで言ってもらいましょう。まったくばかげてるつたらありやしない」

甥はまた大笑いをはじめ、感染をふせぐのはまったく不可能だった。ふつくらした姉妹も香酔をつかつてそれに抗おうとしてみたけれど、まわりは全員フレッドの例にならった。

「僕はただこういいたいだけなんだ」甥はつづけた。「叔父さんが僕らのことを嫌って僕らと楽しく過ごさない結果は、僕が思うには、叔父さんが楽しくすごす時間を失ってるってことだからね、それもその時間はなんら叔父さんに不利益をもたらすものじゃないのに。あのうすぐらい古い事務所やほこりっぽい寝室で一人で考え込んでるんじゃない見つけられないような仲間をみすみす失ってるのは確かだと思うんだけどなあ。僕は

叔父さんが好もうと好まざると、毎年チャンスをあげるつもりだよ。かわいそうじゃないか。死ぬまで永遠にクリスマスに毒づくつもりかもしれないけど、それでも僕が叔父さんに挑戦すれば少しは考えるようになるでしょう、そう、僕が毎年毎年、上機嫌であそこへ訪ねていつて、スクールジ叔父さんご機嫌いかかというのをきけばね。もしそれであのあわれな事務員に五十ポンドでも遺していく気になったら、万々歳だよ。僕が思うに、昨日も少しはゆさぶったんじゃないかな」

スクールジをゆさぶつただなんて、こんどはみんながその考えに笑う番だった。でも根っからのよい気性だったので、自分が笑われることは大して気にせず、みんなはともかくにも笑ったけれど、みんなをもつと陽気に笑わせ、ボトルを楽しそうに廻した。

お茶の後は、かれらは音楽をはじめた。音楽をたしなむ一家であり、無伴奏で歌ったり輪唱させたらそれはなかなかのものだった。まさしくトツパーなんかはバスでなかなかの美声を聞かせ、それでいておでこに太い血管をみせたり、顔中を真っ赤にすることもなかった。スクルージの姪は上手にハープをならし、いろんな曲をひくなかで一つ小曲をやったが（なんでもない曲で、二分もあれば鳴らせるようなもの）、それは過去のクリスマススの精霊が思い出させてくれたようにスクルージを寄宿舎から連れ帰ったあの子がよくやっていたものだった。この曲の旋律がなりひびくと、精霊がみせてくれたすべてのものが心の中に浮かんできた。スクルージの頑な心もだんだんやわらいでいき、もしこの曲をもつと何年も前からよく聴いていたなら、ジェイコブ・マーレーを埋葬した墓堀男のクワをもつてしてで

なくとも、自分の力で幸せで優しさにあふれた人生をはぐくめたのかもしれない。

ただみんなは一晩音楽だけをやったわけではなかった。しばらくすると、罰金遊びをはじめた。ときには子供になつて悪いわけもなからうし、なによりクリスマスで、クリスマスには全能なるキリスト自身が子供なわけだから。さて、ここらでやめておこう。まず目隠し遊びをやった。もちろんまず最初にだ。ただ私はトッパーは靴に目がついてないのと同じくらい、ちゃんと目隠しがされてなかったと思う。私に言わせれば、スクルージの甥とのあいだで話がついてたに違いない。そうして今のクリスマスは、その精霊もそれをしてた。レースの服を着たふつくらした女性を追いかけるやり方ときたら、人の信じやすさにこれでもかと思つてこんだものだった。暖炉の器具をけつとばした

り、椅子をひつくりかえしたり、ピアノにぶち当たったり、カーテンにくるまったりしたが、女性のいくところはどこへでもついていった。ふつくらした女性がどこにいるかを常に把握していて、他のものを捕まえる気は毛頭なかった。わざと本人に捕まるようにしても（中にはじっさいにそうするものもいたが）、つかまえようとするふりこそするものの、ほとんど理性に対する侮辱といつてもいいほどで、横にそれてはふつくらした女性の方へと逸れていくのだった。女性もフェアじゃないわと抗議の声をあげたが、まさしくそのとおりで、とうとう彼女はつかまってしまった。彼女はシルクのさらさらする音や、目の前をぱたぱた急いで通り過ぎていったりしたが、逃げられない角に追い詰められてしまった。それからの彼の行動ときたら、まったくひどいものだ。彼女だとわからないふりをして、かみかぎ

りにさわつてみる必要があるふりをしたり、そのうえ、たしかに彼女だと確かめなきやとばかりに指にはめている指輪だの、ネックレスをさわつたりしたのは卑しい、恥ずべきことである。次のゲームがはじまったとき二人がカーテンの陰でこつそり話してたのは、そうしたことを彼女が言つてたものに違いあるまい。

スクルージの姪は目隠し遊びには参加していなかったが、大きな椅子と足台でゆつたりとしていて、その隅は快適な場所であり、精霊とスクルージも彼女のすぐ後ろにいた。しかし姪も罰金遊びには参加し、アルファベットすべてをつかつて見事に自分の夫のことを愛している文をつくりあげた。同様に「いつ、どこで、どのように」のゲームでも姪は抜群で、スクルージの甥が口にはださずひそかに満足していたことに、姉妹を完全に

うちまかした。敢えて言っておくが、姉妹たちとてけっして頭
の働きのにぶい娘たちではなかつたのだが。二十人やそこらの
人がいて、老いも若きもゲームをやり、それにはスクールジも
加わっていた。というのも自分がなにに興味をひかれていたの
か、そして自分の声が彼らの耳には届かないことをすっかり忘
れ、ときには自分の推測を大きな声で口にしたりして、その推測
はまたしばしば的中していた。なぜなら針の穴が壊れないと保
証つきのホワイトチャペル製のもつとも鋭い針でさえ、あまり
さえた状態じゃないスクールジよりもずっとするどくはなかつ
たからだ。

精霊はスクールジのそうしたようすをみて楽しげにやさしく
見守っていた。しかしスクールジが子供のようにお客がかえる
までずっといたいとお願ひしたときは、それはできないと言下

した。

「ほら新しいゲームがはじまった」スクルージはこぼした「三十分、あと三十分だけ」

それは YES!NO とよばれるゲームだった。スクルージの甥がなにかについて考えなくてはいけなくて、残りのメンバーがそれになにかをあてるのだ。甥が他の人の質問に答えていいのは、そういったわけで YES か NO だけというになる。やつぎばやにそこに質問がなげかけられ、動物のことを考えているのがわかってきた。生きている動物で、どちらかといえれば好ましからざる動物で、残忍な動物であり、ほえたりうめいたりもするし話もして、ロンドンにもおり、道も歩くといった具合だった。ただ動物園にいるわけではなく、誰かに引き回されてるわけでもなければ、見世物にもなっていないし、市場で殺されるわけでも

ない。馬でも、ロバでも、牛でも、雄牛でも、虎でも、犬でも、豚でも、猫でも、クマでもなかった。新しい質問が投げかけられるたびに、甥は大爆笑して、それ以上ないくらい面白がり、ソファから立ち上がり足踏みするくらいに勢いだった。とうとうふっくらした娘が、おなじような状態になり、大声でさげんだ。「わかったわ、なんだか分かったの。もう分かったわ」

「なんだい？」フレッドはさげんだ。

「あなたの叔父さんのスクールジよ」

大正解だった。一堂納得と叫びたようだったが、幾人かは「クマか？」という問いには「Yes」であるべきだとこぼした。Zの回答はスクールジかなと思っただけでも、そこから考えをそらすのに十分だからというわけだ。

「こんなに楽しませてくれたんだから」フレッドは言った。「彼

の健康を祝すのも悪くはあるまい。ちやうど温まったワインがグラスになみなみと注がれている。さあ『スクルージ叔父さん、乾杯』

「スクルージ叔父さん、乾杯」と全員が斉唱した。

「スクルージ叔父さん、メリークリスマス、そしていい新年を、本人がどうあれね」スクルージの甥は続けた。「僕にそういつてほしくはないだろうけどね、でもそうあることを祈るよ、スクルージ叔父さん」

スクルージ叔父さんはだれも気づかないが明るく快活になり、そのためにもし精霊が時間さえくれれば、お返しに無意識に仲間入りをして、誰にも聞こえない声で感謝をのべようとしたほどだった。でもそうした光景は、甥が話してる最後の言葉が終わらないうちに消え去ってしまった。そうしてスクルージと精

霊はふたたび旅立つた。

多くのものを見聞し、はてしないところまで二人は旅した。多くの家庭を訪れたが、そのいずれもが幸福な結果をもたらした。精霊が病人の床の側に立てば回復し、遠い国にいる人の側にいけば故郷を近く感じる事ができた。苦難にみちているものにはより希望を大きくしてやることで耐えられるようにし、貧困にあえぐものは豊かにしてやった。救貧院、病院、刑務所、あらゆる惨めなものたちの集まるところには、ちいさな誇りを胸にいだきつまらぬ虚栄心を見せびらかす人間が固くドアを閉ざし精霊をしめだすようなことはなく、精霊はかれらに祝福をあたえ、スクールジには教訓をあたえた。

もし一晩だとすれば、それは長い長い夜だったが、スクールジにはそのクリスマスは今まで自分たちがすごしてきた時間

を圧縮したもののようには見え、到底一晩だとは思えなかった。またスクルージの外見がまったくかわらないのに、精霊が歳をとっていく、明らかに老けていくのも奇妙なことだった。スクルージはこの変化にすでに気づいていたが、子供たちの十二夜のパーティを離れるまではそのことを口にしなかった。というのもパーティでは外に二人はいたので、そこで精霊の方をみると白髪になっていたからだ。

「精霊の寿命とはそんなに短いものですか」とスクルージが尋ねると、

「この世界での寿命はとても短い」と精霊は答えを返した。「今晚でつきるんだ」

「今晚ですって」スクルージは思わず声を大きくした。

「今日の真夜中だよ。よく聞くんだった、ほらその時間がせまつて

るよ」

そのとき鐘は十一時四十五分をうちならした。

「失礼なことを尋ねてしまいかもしれませんがご容赦あれ」スクルージは、精霊の上着を注意深く見守りながら口火をきった。「なにか奇妙なものが目にはいるんですが、あなたの体の一部とは思えないようなものがすそから飛び出てるようなんですが、足かツメですかな」

「ツメかもしれんな、というのもその上にも肉体があるからな」と精霊は悲しげに答えた。「ほらここをみるんだ」

と、上着のひだの間から二人の子供をとりだした。みじめでもしく、むかむかするような醜く悲惨な子供たちだった。そして精霊の足元にひざまづく、上着の外側をのぼりはじめた。

「よくこれを見るんだ、しかとな、ここをだぞ」精霊はさししめした。

二人の子供は男の子と女の子で、黄色く、やせほそつており、ぼろをまとい、しかめつらで、残忍な顔つきをしていたが、自分を恥じてうずくまっていた。形姿に美しい若さがみち、生き生きとした肌色で彩られているべきところが、若さをうしないしなびたまるで老人の手が、かれらをつまみあげ、こねくりまわし、ずたずたにしていた。天使たちがすわりこんであがめているべきところに、悪魔たちがはびこりにらみつけていた。ありとあらゆる生き物の神秘で、どれほど人間に変化や墮落や悪化があるとも、この怪物たちの半分ほども恐ろしく恐怖をいだかせることはなかつただろう。

スクルージはぞつとしてあとずさりした。こんなふうの子供

たちをみせられたので、かわいいお子さんたちですねと言おうとしたが、そんな大それたウソをつくような言葉は出てこなかった。

「精霊さま、あなたのお子さんですか」 スクルージはそれ以上いえなかつた。

「人類の子供だよ」 精霊は子供たちを見下ろしながら答えた。「かれらはずっと祖先から私に訴えかけているんだ。男の子が無知で、女の子は貧困だ。二つともに、それに関わるありとあらゆるものに気をつけねばならん。特に男の子には。そういうのもその額には消されていなければありありと破滅とかかかっているのが見えるからな。それを否定してみろ」 精霊は街のほうに手を伸ばしながらさげんだ。「そして破滅を教えてくれるものをそしるがよい、争いを好むなら破滅をみとめ、事態を悪化さ

せ、結果を甘受するんだな」

「逃げる場所や方法はないんですか」 スクルージは尋ねた。

「監獄はなかつたんだっけ」 精霊はスクルージのほうをむいて、スクルージが前に言った言葉を繰り返した。「感化院はないのかい？」

鐘は十二時をうった。

スクルージは精霊をもとめてあたりをみまわしたが、目には何ももうつらなかつた。鐘の余韻がやんだときスクルージはジェイコブ・マーレーの予言を思い出し、視線をあげると、着飾つてフードをかぶった一人の精霊が地面にそつた霧のようにこちらの方にやってくるのが目に入った。

訳注 1 豚の頭などの肉を調理して、ゼリーで固めたもの (【米
headcheese).

第四章 最後の精霊

精霊はゆっくりとおごそかに音をたてず近づいてきた。精霊がやってくるあいだ、スクルージはこの精霊がうごくのにまつわる雰囲気そのものが陰鬱さと神秘さを振りまいているように思えたのでひざまづいていた。

精霊は深闇の上着にすっぽり身をかくし、頭も顔も姿もみせず、片方の手を伸ばしている以外は何も見えなかった。この手がなければ、夜からもまわりを囲む闇からもその姿を見分けることは難しかっただろう。

ただスクルージは精霊が側にきたとき背が高く威風堂々としていることは感じ取ることができ、その神秘の存在で畏敬の念

にうたれた。精霊は口も開かなければ、動きもしなかつたので、スクルージにはそれ以上のことはわからなかつた。

「私の前にいらつしやるのは、これからくるクリスマスの精霊でしょうな」とスクルージは口をひらいたが、精霊は何も答えず、ただ先の方をさししめした。

「まだ起こつていない事、ただこれから起こる事の影をわしに教えてくれるんでしょう」とスクルージは続けた。「そうじゃないんですかい、精霊殿？」

まるで精霊がうなずいたかのように、その瞬間上着の上の方がくしゃつとなつた。それがスクルージに与えられた唯一の返事だつた。

スクルージはこのときにはずいぶん精霊の相手をするのもなれていたとはいえ、これほど押し黙つた姿にさすがに恐怖をお

ぼえ、足はぶるぶるふるえ、あとをついていこうとしても立っていられないほどだった。精霊はしばし待ってくれて、その様子をみて、震えが止まるの猶予をくれた。

しかしスクルージの震えは止まるどころがいつそう悪くなり、なんともいえない恐怖にすっかり身を縮ました。とくにあの暗いおおいの後ろでは精霊の目がじつと自分の方をみているのに、自分ときたらどんなに目をこらしてもぼんやりした片手と黒い塊しか見えないのだから。

「未来の精霊殿」スクルージはさげんだ「今までの精霊殿よりあなたがずっと怖く感じます。ただあなたがわしによくしてくれようとしていることは知ってますし、今までの自分とは違う自分になろうとも思ってます。だから我慢してあなたとお供して、感謝しようとも思ってますが、ずっとしやべらないおつも

りですかい？」

なんら返答はなかったが、手は前を指し示していた。

「行きましよう、行きましようや」 スクルージはつぶやいた。「夜はすぐあけてしまいますし、わしにとつても時間は貴重ですから。わかつてます、精霊殿、行きましよう」

精霊はスクルージに近づいてきたときとおなじように動いていき、スクルージはその上着の影にくるまれるようにしてついていった。というか、持ち上げられて運ばれているようだった。

二人はたぶん街の中にはいったようだった。というのもむしろ街のほうがまわりに浮かんできて、ぐるりと二人の周りを取りかこんだようだったからだ。ただ二人は街の中心部、商人たちで混みあう市場に入っていた。商人たちは忙しそうに動き回りながら、ポケットの中でお金をちやりちやりいわせ、集まっ

てなにやら話しては、時計をみて、思案にふけりながら大きな金色の印鑑をいじくつていり、その他スクールジもよくみかけていた事をしていた。

精霊は商売人たちのあるかたまりのそばで立ち止まった。手はその集まりを指し示していたので、スクールジはその会話に耳を傾けた。

「いいや」でつぷり太つてぞつとするようなあごをした男はこう続けた。「どちらにせよよく知らんのだよ。知ってるのは死んだつてことだけだよ」

「いつ死んだんだい？」別のものが尋ねた。

「昨晚だと思ふよ」

「どうして、何がおこつたんだい？」大きなカギ煙草入れからたつぷりとカギ煙草をつまみながら、また別のものが口をはさ

んだ。「殺しても死なないと思つたがな」「知るもんか」最初の男があくびをしながら答えた。

「やつの金はどうなるんだろう」鼻に大きなできものが出てくる赤ら顔の男が、まるで鶏があごのたるみをゆらすようにしながらそう尋ねた。

「聞いてないな」大きなあごの男はまたあくびをしながら答えた。「会社にでも遺したんでしよう。わしには遺してなくて、それだけは確かですな」

一堂はそこでどつと笑つた。

「とても安上がりな葬式になるんでしような」同じ男が続けた。「わしは葬式に行くって人を誓つてまったく一人も知らんですから。いつそわしらみんなで有志をつのるかいは？」

「昼飯がでるなら行つてもいいがね」鼻にできものがある男が

口をはさんだ。「腹が減つてはいくさができぬとね」

一堂はふたたび笑つた。

「さてこうしてみると、みんなの中で私が一番関心がないみたいだね」最初の男がこう答えた。「黒い手袋もしてなきや、昼飯も食べる気がしないからね。ただ誰かが行くなら葬式には出てもいいな。考えても見れば、やつにとつては一番仲のいいほうの友人だつたと言つてもいいぐらいかもしれないし。あえぼ立ち止まつて話ぐらいしたもんですしね。では」

かたまつて話をしていたものは散り散りになり、他の人たちと話し始めた。スクルージはその人たちを知つていて、説明をもとめるかのように精霊の方をみた。

精霊は通りを進んでいき、二人の男が話しているのを指さした。スクルージはそれが説明になるのだらうとふたたび耳をか

たむけた。

スクルージはその二人の男もよく知っていた。二人も商売人で、とても裕福であり、有力者だった。スクルージはこの二人に覚えよろしくしようとかんばっていたものだった。もちろん商売のため、純粹に商売のためだけにそうしていたのだが。

「こんにちは」と一人がいうともう一人も挨拶をかえし、「そういえば、おいぼれもとうとうくたばったみたいだね」と最初の男が続けた。

「うん、聞いたよ、寒さでやられたんだろうな」

「クリスマスの時期にふさわしいな。ところであなたはスケートはするんですっけ？」

「いいや、他にも考えることがあるんでね、ごきげんよう」

他には何もなく話はまさしくこれだけで、二人は別れた。

スクールジは始め、精霊が一見したところこれほど意味のない会話に重きをおいたのに驚くばかりだった。ただ心ではそこにはなにか隠された意味があるにちがいないと思つていたので、腰をおちつけてどういふことなのかよく考えてみた。自分の共同経営者だったジェイコブの死とはなんら関係があるようには思えなかつた。それは過去のことであり、この精霊の受け持ちは未来のことなのだから。ただ自分と深いかかわりのある誰かということではすぐには浮かんでこなかつたし、浮かんできても前の会話には当てはまらなかつた。ただ当てはまるのが誰であらうと、自分がよくなるための教訓がかくされていることはあきらかだったので、耳にする言葉、見たもの一つ一つを心にきざもうとした。とくに自分自身の姿があらわれたときはそれを見逃すまいとした。なぜなら自分自身の将来の行動がみすご

しているなんらかの徴をしめしてくるにちがいないし、こうしたもつれた謎をほどこいてくれるのではと思つたからだ。

その場所で自分の姿をもとめてさがしまわつたが、いつも自分が立つている場所には別の男がたつていた。時計をみるといつも自分がそこにいる時間をさしていたが、入り口からながれこんでくる群集のなかにも自分の姿形はこれっぽちもみとめることができなかつた。ただそれにもスクルージはほとんど驚かなかつた。心の中では人生を一変させることを思い描いており、その人生ではまったく新しく行いを改めることを考え、希望していたからである。

暗闇で物音一つしなかつたが、スクルージの側には精霊が手を伸ばしてたつていた。じつと物思いにふけつている状態から我にかえつてみると、手の方向からは、見えない視線は自分自

身を鋭く射抜いているように思われ、身震いがして肝を冷やした。

二人は喧騒をはなれ、街のへんぴな場所へと移動した。その場所は、だいたいの状況や悪いうわさは耳にしていたが、スクリューも足を踏み入れたことがないところだった。道はぬかるんでいて狭く、店や家々はぼろぼろだった。人々の身なりもひどく、よつぱらっており、だらしがなく、汚かった。路地や道からは、まるでそこが汚水溜めかのように、人にあふれた道へとくさい臭い、泥、ひどい生活を発していた。そうした一角全体に、犯罪、ゴミ、不幸が満ち満ちていた。

このような悪名高いゴミのための奥ふかくまですすんでいくと、片流れ屋根の下にせまつくるしく出っ張った店が一軒あった。そこには鉄くず、クズ、あきびん、骨、べたべたした廃物が運

び込まれていた。店の中では床の上に、さびたカギ、釘、くさり、ちようつがい、とじ金、はかり、おもりといったありとあらゆる鉄くずがうずたかく積みあがっていた。好き好んでみるものもないような秘密が、ひどいクズ、廃油のかたまり、骨のお墓で醸成され隠されていた。そういったものに埋もれるようにして、七十歳にもなろうかという白髪の老人が古びたレンガでできた木炭ストーブのそばに座っていた。寄せ集めのぼろきれからつくった汚らしいカーテンをつるして寒さよけにしており、暖かな状態ですつかりくつろいでパイプをふかしていた。スクルージと精霊がこの男の目の前までやってきたとき、ちようど一人の女が大きな荷物をしよって店にこつそりと入ってきた。その女が店にはいるかどうかというときに、もう一人の同じように大きな荷物をしよった女も店にはいつてきた。そのす

ぐあとに色あせた黒い服の男がつづいていた。男は女二人の姿をみて、女二人がお互いに驚いているのとおなじくらいびっくりぎょうてんしていた。いつしゅんの間のあと、パイプをくわえた老人もくわわつて、みんな大笑いをはじめた。

「家政婦だけでも最初にくるものを」最初に入ってきた女はそうさげんだ。「で、洗濯女だけでも二番目で、葬儀屋だけでも三番目だ。みてごらんよ、ジョー、なんてこつたい。もののひょうしで出くわすこともあるんだねえ」

「ここほど出くわすのにうつつけの場所もなかるうよ」ジョーはパイプから口をはなすと云った。「さあ中へ入ってくれ。ずつと前からおかまいなしじゃないか、他の二人とて全く知らぬというわけでもなし。店の戸をしめるまでまっつてくれ、まっつたくなんてきしむだろうな。ここにもこのちようつがいほどきしん

でる奴はあるまいよ。はっはっは。みんな天職だな、いい組み
合わせだよ。中へはいつてくれ、中へ」

中とは、ぼろきれのあちらがわの場所だった。老人は階段の
敷物を押さえる棒で火をあつめ、すすけたランプの芯をパイプ
の柄でととのえ(夜になつていたので)、ふたたびパイプを口に
くわえた。

老人がこうしているあいだ、すでに口をひらいていた女は荷
物を床に降ろして、これみよがしにひざの上でうでぐみしながら、
軽蔑のまなざしを残りの二人にむけて椅子に腰をおろして
いた。

「なにがおかしいんだい、なにが。デイルバーさんよ」女は口
火をきつた。「だれだつて自分のことを構うもんだろ。ま、やつ
はいつもいつもそうだつたけどね」

「まさしくその通り」洗濯女も同意した。「比べようがないくらい」

「じゃあなんだって、まるで怖がつてるみたいにそんなに立ってにらむもんじゃないよ、おまえさん。誰も秘密を知りやしないよ。あら捜しをしようってわけじゃあるまいし」

「そうとも」デイルバーと男は声をそろえた。「やめとこう」

「よしよし」女はさげんだ。「それでいいよ。こんなささやかなもんがなくなつたところで誰に損が及ぶというんだい。死んだ男だつてね」

「まさしくそうだあね」デイルバーも笑いながら答えた。

「もし死んだあとでもそのままにしてほしけりや、あのごうつく爺は」女は続けた。「なんだって普通の人生をおくらないんだらうね。そうしていれば、死ぬときくらい誰かに看取ってもらえ

そうなもんだよ。あんなふうに一人きりで息を引き取るかわりにね」

「それこそまさに真実をいいあててるね」デイルバーはもらした。「それこそ奴に下された審判というわけだ」

「願わくばもつと審判が重くてもよかったねえ」女は答えた。「そうすればそれに従つて、もつと別のものを手に入れていたかも知れない。包みをあけな、ジョー、そんで中のものに値段をつけとくれ。ぎつくばらんに頼むよ。最初でもかまわんし、別に誰に見られててもかまいやしない。おたがいさまだつてことはここで会わずともよく承知してるよ。別に悪いことじゃないよ、さあ包みをあけてくれ」

ただ仲間の俠気がそうはさせなかつた。色あせた黒い服の男が最初に荷物をほどき、盗品をぶちまけた。そう高いものはな

く、印鑑が一つ二つ、ふでばこ、一對のカフス、大して価値のないブローチでぜんぶだった。ジョーは一つ一つ詳細に調べて値踏みし、壁にひとつずつ値段を書いていき、それ以上品物がなくなつたところで合計をだした。

「これが取り分だよ」ジョーは言った。「足をもつて逆さにつるされても、これ以上はびた一文出せないね。お次は誰だい」

デイルバーが次だった。シーツ、タオル、下着とスプーンが二本、砂糖はさみが一つにブーツが二、三足。その取り分もおなじように壁に書かれた。

「女にやいつも甘いんだ。それがわしの弱いところだよ、で身をもちくずすというわけだ」ジョーはそうこぼした。「これが取り分だ。もつてほしいなんてぬかしてごねるようだったら、こんなに奮発したのを後悔して、半クラウンは少なくするぞ」

「じゃわたしの包みをほどいとくれ、ジョー」と最初の女がしやしやりでた。

ジョーはそつちのほうがほどきやすいので両膝をつき、いくつも結び目がある包みをほどき、大きななにかくろいものがぐるぐるまきにされているものを引つ張り出した。

「なんだいこれは」ジョーは尋ねた。「寢室のカーテンかな」

「おう」女は組んだ手を前にもちあげて大笑いしながら答えた。「寢室のカーテンだよ」

「やつが横たわったまま、輪つかやなんかごとそつくりこれをもつてきたというわけじゃないだろうね」

「その通りだよ」女は答えた。「いけないかい」

「金儲けの星の下にうまれついたようなやつだな」ジョーはこぼした。「そんなことまでするなんて」

「手の届くものが手に入るときに、手控えるなんてとんでもない。しかもあんなやつのもものならなおさらだ、誓つてもいいくらいだよ、ジョー」と女はいたつて平静に答えた。「油を毛布にたらすんじゃないよ」

「やつの毛布だつて？」 ジョーは尋ねた。

「他のどいつのものだと思つてるんだい」女は答えた。「なくても風邪をひくわけでもあるまいし、ま、いわせてもらえばだがね」

「なんかの病気で死んだんじゃないことを祈りたいもんだ」ジョーはそうこぼすと、手をとめて視線をあげた。

「そんなことあ心配しなくてもいいよ」女は即答した。「やつがそんなことになつてゐるつてのにあたりをうろついて、いつしよにいるほど物好きじゃないんでね。そうだろ、しつかりシャツ

を見ておくれよ。ま、どんなに見たところで穴なんてありやしないし、すりきれてもないけどな。持ってた中じや一番いいやつだし、なかなかものもいいよ。わたしやが手に入れなきや、無駄になるところだったんだからね」

「無駄になるつていうのはどういふことだい」ジョーは尋ねた。「そのまま着せといったら確実にいっしょに埋葬されちゃうつてことだあな」女は笑いながら答えた。「どつかのばかどもはそうするもんだよ。だからわたしやが脱がせたんじやないか。もし更紗で十分じやないつていふなら、他のなにで十分なのか知りたいもんだね。なんせやつの体にぴったりだったし、シャツを着ているより更紗の方がみつともないつてこともないだろうしな」

スクルージはこの話を恐怖におののきながら聞いていた。か

れらは略奪品を中心にあつまっていたが、わずかばかりの光は老人のランプからもたらされるもので、その風景はスクルージをもうんざりさせ、嫌悪をおさえきれないものだった。それは、悪魔が死体をやりとりしてたつてこんなにごいことにはならないだろうと思われるほどだった。

「はっはっは」ジョーがお金の詰まったフランネル製のかばんから、おのおのの取り分を床の上でかぞえあげたとき、女が笑い声をたてた。「これで決まりできあな。やつは生きてるときは人を遠ざけてたもんだが、死んだときになつてこちらを潤してくれるとはね、はっはっは」

「精霊さま」スクルージは足の先から頭までぶるぶる震えながら言葉をしぼりだした。「わかりました、わかりました。この不幸な男のことはわしにもあてまるといふことですか、確かにわ

しの人生はこんなふうでした。慈悲ぶかき神よ、これはどうしたことでしょう」

風景が一変したのでスクルージは恐ろしきでたじろいだ。今いるところはほとんどベッドにさわれるところだった。そっけない、カーテンもとりはらわれたベッドで、みすぼらしいシーツがかかっており、その上になにかがよこたわっていた、それは物音をなんらたてなかつたが、それゆえなんであるかを語らずとも物語っていた。

部屋はとても暗く、くらすぎて何があるかも分からないほどだった。ただスクルージは内心の衝動にかられてそこがどこかを確かめようとあたりをしかと眺め回した。外から朝日のあおじろい光がベッドに差し込んだ。そしてそこには、身の回りのものをすべて強奪され、見捨てられた、誰も涙を流すものもい

なれば看取るものもない男の死体がひとつあるだけだった。スクルージは精霊の方をじつとみた。そのゆるがざる手は死体の頭の方をさししめしていた。顔のおおいはとりあえずとといった感じで、わずかに指一本でももちあげれば、その死体の顔をおがめそうだった。そうは考えたが、自分の側から精霊をおっぱらう力がのこつてないのと同様、そのおおいははずす力も残っていないかった。

寒く、寒く、硬直した恐ろしい死がここに汝の祭壇をつくり、汝のおもいのままに恐怖でもつてその祭壇を飾り立てる。ここがおまえの領土だからだ。ただ、愛すべきもの、あがめられるもの、尊敬されるものは髪の毛一本たりとも汝の恐ろしい目的のために動かさないし、姿かたちをおどおどろしいものにすることもない。それは今手が重くなり、はなせば落ちてしまうか

らでもなければ、心臓や脈がとまっているからでもない。過去に手が開かれていて、やさしく、真実味にあふれていたからであり、心は勇敢であたたかく、優しさにみちていたからだ。脈がまさしく人のものだったからだ。去れ、影よ、去れ。そしてよい行いが傷からうまれ、永遠の命で世界へ種撒かれるのをみるがよい。

どこからか声がしてスクルージにこのようなことを言ったわけではない。ただベッドをみていたとき聞こえてきたわけだ。スクルージはもしこの男が今立ち上がれば、まずなにを考えるだろうと思った。金儲け、冷酷な取引、あるいは嫌がらせか。こうしたものがこんな結末をまさしくもたらしてくれたわけだ。まったくの一人つきりで、一人の男も女も子供さえもあれやこれやよ彼がよいことをしてくれたというものはおらず、またそ

の一言の思い出ゆえにお返しをするんだというものもいなかった。猫が一匹ドアをひつかいており、暖炉の下ではねずみがかじる音がした。この死の部屋でなにをしたいのか、どうしてそんなに落ち着きがなく騒がしいのか、スクルージにはあえて考えてみるだけの勇氣はなかった。

「精霊さま」スクルージは声をふりしぼった。「ここは恐ろしい場所です、ここを離れても教訓は忘れません。信じてください、さあ行きましょう」

しかし精霊は微動だにせず、指はじつと頭の方をさししめしていた。

「わかります」スクルージは答えた。「できればそうしたいんですが、力がないんです、精霊さま、力がでてこないんです」
精霊はまたスクルージのことを見据えているようだった。

「この街でもしひとりでも、この男が死んだことを悲しく思っているものがあるなら」スクルージは必死に言葉をつないだ。「その姿をみせてください、精霊さま、お願いします」

精霊は黒い上着をスクルージの前に翼のように一瞬広げ、引つ込めると、日の光がさしこむ部屋に母親と子供が姿をあらわした。

母親は誰かを待ち受けていて、それもかなり気をもんでいるようだった。というのも部屋を気もそぞろにあちこち歩きまわり、あらゆる物音にはつとして、窓から外をながめていて、時計をみつめていたからだ。針仕事をしようとしていたがそれも手につかないようすで、子供たちがあそんでいる声でさえ我慢がならないようだった。

とうとう待ち受けていたノックが聞こえた。いそいでドアの

ところに行き夫を出迎えた。夫の顔はまだ若いにもかかわらず、やつれ疲れがにじみでていた。ただ今はその表情には自分では恥じていたが隠しようのない心からの喜びがうかがえた。

暖炉のそばで温められていた夕食が出されている食卓につくと、妻がどうだったと力なげにたずねたとき（それほど間をおいてというわけではなかったが）、夫はどう答えていいのやら戸惑っているようだった。

「よかったのそれとも悪かったの？」妻は助け舟をだした。

「悪かった」夫は答えた。

「じゃあ破滅ね」

「いいや、まだのぞみはあるよ、キャロライン」

「あの人の態度が軟化すれば、そりや望みはありますけど」妻はなげいた。「そんな奇跡がおきるだなんて、望みにもほどがあ

りますわ」

「軟化どころじゃないんだよ」夫は答えた。「死んだんだ」

妻は温和ながまんづよい性格で、表情がよくそれを伝えていた。ただ死んだということを引きいて心から感謝の念を抱かないわけにもいかなかったし、両手をたたいてそれを口にした。もちろん次の瞬間にはその許しをこい、謝ったが、最初の反応こそが本心からのものだった。

「昨晚話したあのよつぱらいの女が言ったことが、そうぼくが彼に会って一週間の猶予をもらおうとおもったときによ、単にぼくのことを避けているんだと思っただけで、まったくの本当のことだったことがわかったんだ。病状がかなり悪いだけじゃなく、死にかけていたんだよ」

「誰にわたしたちの借金はいくのかしら」

「わからないよ、ただそれまでにお金も用意できるだろうし。用意できないにしても、あれほど慈悲のかけらもないやつにいくほど運が悪いって事もないだろうよ。今夜はやすらかな気持ちで床につけるよ、キャロライン」

そう確かに、隠そうとしてもかくせないぐらい、かれらの心は軽くなつていった。子供たちの顔も明るくなつていき、自分たちはまつたくわからないことを聞こうといそいでまわりに集まつたりしていた。これがあの男の死によつて幸せになつた家庭だつた。精霊がこのできごとによつて唯一スクルージに示すことができた感情的な表現といえ、それは喜びだけだつた。

「どうか死に關係があつて、心やすらかなになるようなことをお見せください」スクルージは口にした。「そうでもない、精霊さま、あの今までいた暗い部屋が今にも自分の眼前に迫つてく

るんです」

精霊はスクルージが歩きなれたいくつかの通りを抜けていき、スクルージはあちらこちらに自分の姿をおいもとめたが、どこにもその姿はなかった。二人は貧しいボブクラチェットの家に入つていった。前にも訪れたことのある住居で、母親と子供たちが暖炉をかこんでいた。

誰一人音をたてるものはおらず、とてもしずまりかえつていた。さわがしい二人の兄弟でさえ片隅でまったくしずかにして、本をひろげているピーターを見守つていた。母親と娘たちはぬいものをしていたが、一言も口をきかなかつた。

「子供をかかえあげ、みんなの真中に置きました」

スクルージはどこでこの言葉を聞いたのだろうか？ 夢に見たわけでもあるまい。スクルージと精霊が敷居をまたいだとき

に、ピーターが読み上げたのに違いない。それにしてもどうして先を続けないのだろうか。

母親は仕事をテーブルになげだすと、顔に手を当てた。

「この色は目を疲れさせるね」母親は口にした。

この色！ ああかわいそうなちびっこタイム。

「ずいぶんよくはなつてきたけど」母親は続けた。「ろうそく的光じゃなおさらよくないよ。お父さんがかえってきたときには絶対目をしょぼしょぼさせたくないものね。さてそろそろお帰りの時間だよ」

「もう過ぎてるよ」ピーターは本をとじて答えた。「でもここ数日はいつもよりゆっくり歩いているんだと思うな」

ふたたびみんなは黙り込み、とうとう母親はただ一度だけふるえたがしつかりした明るい声をふりしぼった。

「そう、いつしよに歩いていたらものねえ、ちびつこのタイムを肩車して早足で歩いていたらものねえ」

「僕もよく見たよ」ピーターも続け

「私も」と他のものも続け、みんなが賛同した。

「ずいぶん軽かったものねえ」母親は仕事に取り組みながら思い起こすようにいった。「お父さんはずいぶんかわいがっていたものねえ、だから苦でもなかったのよ、まったくね。あらお父さんが帰っていらしたわよ」

母親は迎えに出た、ボブはぼうしをかぶったまま入ってきた。ボブにはかわいそうに少しでもあたたためてくれるものが必要だったのだ。暖炉にすでにお茶がはいつていて、みんなでせいっぱい父親をほげまそうとした。クラチェット兄弟はひざのうえにのぼり、ちいさなほつぺたを顔におしあて、まるで「大丈夫、

大丈夫だからお父さん、そんなに嘆かないで」とでも言つてるようだった。

ボブは家族にすつかりはげまされ、明るく家族にはなしかけた。テーブルの上の仕事をみては、妻と娘たちのてきばえと仕事のはやさをほめたてた。日曜よりずっと前に終わつてしまふな、と父親はもらした。

「日曜ですつて！　じゃあ今日行つてきたんですね、ロバート」妻は口にした。

「ああおまえ」ボブは答えた。「いつしよに行けるとよかつたんだがな。あそこの場所がどれほど青々としてるかみせてやりたかつたよ。でもすぐにたくさん見ることになるよ。毎日曜日に行くことを約束したからな、ちびっこ、ちびすけや」ボブは嗚咽した。「かわいいそうに」

ボブはその瞬間がまんでできなくなつて泣き崩れた、どうにもがまんでできなかった。我慢できるようであれば、ちびっこティムと今以上にいつそう遠くに離れているように感じたことだろう。

部屋をはなれ、二階へあがっていき、上の部屋にはいつていた。そこは明るくなつていて、クリスマスの飾りがぶらさがつていた。子供のそばには椅子が一脚おいてあり、だれかがすぐ前までずつとこしかけていたようなあとがあつた。ボブはそこにこしをおろすと、物思いに少しふけり、気を取り直すと子供の顔にキスをした。起こつてしまったことと折り合いをつけ、平穏な気持ちになつて階下へと降りていった。

みなが暖炉のそばに集まり、話をした。娘たちと母親はまだ針仕事をしていて、ボブはみなにスクールジの甥のこれ以上な

い親切さについて話した。一回ほどしか会ったことがないのに、あの日道でくわして、自分がすこし気を落としているのを見たと、「ちよつとばかり気を落としているだけだったんだけど」とボブはいったが、なにか気を落とすことでもあったのかと尋ねたのだった。「とにかくかれは楽しそうに話す人だからね、私は話したよ」とボブは語った。「心からおくやみを申し上げます、クラチェットさん、あなたのすばらしい奥さんにも気を落とさないようにお伝えください」と言ってくれたよ。「ところでどうしてそのことを知ってたのか、わからないな」

「何を知ってたの？」

「なんだって、おまえがすばらしい奥さんだってことを知ってたのかってことだよ」ボブは答えた。

「誰でも知ってますよ」ピーターは答えた。

「よく言ってくれた、息子よ」ボブは声を大きくした。「みんなに知ってもらいたいもんだな。『心からおくやみを』って言ってくれたよ。『すばらしい奥さんに』って。もしなにかお役にたつことがあればって」名刺をくれたよ。「そこにかいてあるのが住所で、どうか来てくださいよ」って言ってくれたんだ。「なにかをしてくれるからってこんなに嬉しがつてるわけじゃない。まるでちびっこタイムを知ってくださっていたかのようなのが心をうつたんだよ」

「わたしもその人は本当にいい人だと思うわ」妻も賛成した。「もし会って直接話せば、いつそうそう思うだろうよ」ボブは答えた。「そうよくお聞きよ、ピーターに職を世話してくれたつてぜんぜんおどろかないな」

「ピーター、よくお聞きよ」クラチエツト夫人は言った。

「それで」娘たちの一人がはやしたてた。「ピーターは誰かと結婚して、家庭をもつのね」

「いつまでもこのままやってくよ」ピーターはにこにこしながら答えた。

「すぐにはそうもいかなだろうが」ボブは付け加えた。「そうするまでにはまだずいぶん間があるだろうし。でもいずれはどちらにせよみんなばらにならなきゃいかん。でもちびっこタイムのことは誰一人として決して忘れちゃいかん。そうわたしたちの間のこの最初の別離をだ」

「忘れませんとも、お父さん」みんなが声をあわせた。

「私もだ」ボブも答えた。「あんなに小さかったのに、ちびっこだったのにどれほどタイムが我慢強くて穏やかだったか思い出すと、わたしたちはお互いにすぐに喧嘩するようなことがあつ

ちやいけないし、ちびっこタイムが我慢強くておだやかだったのも忘れちやいけないよ」

「絶対に。お父さん」みんなは再び声をあわせた。

「わたしはとても幸せだよ」ボブはもらった。「本当に幸せだ」妻と娘たちと二人のクラチェット兄弟が父親にキスをして、ピーターとは固く握手をした。ちびっこタイムの魂よ、汝の幼い魂は神からつかわされたものなのだ。

「精霊さま」スクルージは口にだした。「わたしたちの別れる時間がせまつてることがなんとなく分かります。どうやってかは分かりませんが、とにかく分かるんです。で、あそこに横たわつて死んでいた男は誰なのか教えてください」

未来のクリスマスの精霊はスクルージをビジネスマンが集まるところにへとつれていった。それらの場所は前と時間が違う

だけで同じであり、そうした風景には未来のことという一点を除いてはなんら整合があるように思えなかった、ただいずれの場所にも自分の姿はみあたらなかった。ただ精霊はどの場所にとどまるわけでもなく、どんどん進んでいき、スクルージがちよつと待つていただけませんかと嘆願するまで、望みのままの場所へと足をむけているようだった。

「この場所は」スクルージは口をはさんだ「今通り過ぎようとしている場所は、わたしがいる、ずっといた場所なんですよ。この家を見たいんです。未来のわしがどうなっているか見せてください」

精霊は立ち止まったが、その手は別の場所を指し示していた。「家はあつちです」スクルージは説明した。「どうして別のほうを指し示すのですか？」

ただ無常にも手の指し示す方向は変わらなかつた。

スクルージは事務所の窓の方へといそいで、中をのぞきこんだ。そこは事務所は事務所だったが、スクルージの事務所ではなかつた。家具が違うもので、椅子の形も自分の物とは違つていた。精霊は前と同じ場所を指し示していた。

ふたたび精霊についていくと、自分はなぜどこへといったのだろうと怪しみながら、鉄の門のところまでやつてきた。スクルージは門に入る前にあたりを見回しながら入つていた。

そこは墓地だつた。そして名を知らしめられようとしている不幸な男は埋葬されていたのだ。そこは結構な場所だつた。家々に囲まれていて、草や雑草におおわれ、ただそれも生きたものではなく枯れたものだつた。埋葬される人がおおく窒息しそうなほどで、まったく肥えていたといつてもいいほどだつた。

まつたくもつて結構な場所だこと。

精霊は墓のあいだにたつと、一つの墓を指し示した。スクルージは身震いしながらそこへ歩をすすめた。精霊はいままでとかわりがなかったが、その厳粛な姿にはなにか新しい別の意味があるようにもみえ、不安にかられた。

「あなたさまが指し示している墓に近づく前に」スクルージは聞いた。「一つ質問があるのですが答えてもらえますでしょうか？ こうしたものの影が実現する可能性は高いのですが、それとも低いのですか、どうなんでしょう？」

精霊はだまつてただ同じ墓を指し示すばかりだった。

「人の行く末はきまりきった結果になるのでしょうか。もし同じ事を続けていけばそうなるにちがいありません」スクルージは語った。「でももしそのきまりきった道からそれれば、結果もち

がつてきましよう。あなた様が見せてくれたものについても同じだといってくださいまし」

精霊はぴくりとも動かなかつた。

スクルージは依然としてうちふるえながら前に足をすすめた。指し示すのにしたがつて、なおざりにされている墓石に自分の名前、エベネザー・スクルージと書いてあるのを認めた。

「あのベッドに横たわっていたのはわしだったんだ？」スクルージはひざをがくりと落としてつぶやいた。

指し示すのは墓から彼自身になっており、そして再び墓へと向けられた。

「いいえ、精霊さま、いやです、いやです」

ただずつと墓が指し示されていた。

「精霊さま」スクルージは、その上着をしつかりつかみながら

さげんだ。「聞いてください。わしはいままでのわしとは違います。この精霊さまとのふれあいがなかったらなっていただろう自分とは違う自分になります。もう希望がまったくないとしたら、どうしてこれをわしに見せるんですか？」

このときはじめて手はふるえたように思われた。

「よき精霊さま」スクルージは地面にひれふして続けた。「どうかわしのためにとりなしてください、わしを可哀想におもってください。わしにみせてくれたこうした影を、生まれ変わった人生でかえてみせますとも」

そのやさしい手はうちふるえた。

「クリスマスをここから敬いますし、毎年そうしますとも。わしは過去、現在、そして未来に生きていきます。三人の精霊さまもわしとともに生きてくれるでしょう。教えてくれた教訓

を忘れることはありません。この墓石の文字を消し去ることが出来るといつてください」

感情がたかぶり、スクルージは精霊の手をにぎった。精霊はそれをふりほどこうとしたが、スクルージの懇願も負けてはおらず、にぎりしめた。ただ結局は精霊の力の方がつよかったので、スクルージはうちなげられた。

運命をかえてもらおうという最後の祈りで両手をかかげたスクルージが見たのは、精霊のフードと着ているものが変化したことだった。ちぢんで、姿をかえどんどん小さくなり、一つのベッドをささええる柱へとすいこまれていった。

第五章 物語の結末

さて、その柱とはスクルージのベッドの柱だった。ベッドも自分のベッドなら、部屋も自分の部屋だった。これ以上ないほどにうれしいことに、今をきざむ刻も今までの埋め合わせをするように自分の刻だった。

「わしは過去、現在、そして未来に生きていきます」スクルージはベッドから飛び起きてくりかえした。「三人の精霊さまもわしとともに生きてくれるでしょう。それにジェイコブ・マレーも、神様、それにクリスマスも褒め称えよう。ひざまずいていいましようとも、ジェイコブや、ひざまづいてな」

スクルージはいいことをしようという気持ちにあまりにうち

ふるえ満たされていたので、自分の呼びかけにに声が震えて答えられないくらいだった。そして精霊との対面で激しく泣き崩れており、今でも顔がぬれていた。

「ひきはがされたりはしてないぞ」スクルージは、ベッドのカーテンを両腕にかかえ声を大きくした。「リングもなにもかも引き剥がされたりしてない。ここにある、わしもここにいる。影のできごとはあるかもしれないことで、避けようと思えば避けられるのだ。そうだ、そうできることはわかつてるぞ」

スクルージの両手はその間中いそがしそうに上着をまさぐっていた。うらがえしにしてみたり上下さかさまにしてみたり、あげくには破つたり、うっちゃつたりして、上着を相手にありとあらゆるどんちゃんさわぎをやらかした。

「なにがなんだかわからんな」スクルージは笑いながら一息に

そういった。そしてくつしたでラオコーン（訳注1）を演じて見せたりした。「ふわふわした気持ちだよ。天使のように幸せに満ちてるし、子供のようによつぱいのように目がくるくるまわってるよ。メリークリスマス。新年あけましておめでとう、ヤツホー、イヤツホーとな」

そして居間へとなだれこむと、肩で息をしながら立ちつくしていた。

「おかゆの入った鍋だ」 スクルージはふたたび飛び上がりながら、暖炉のまわりをかけまわりさげんだ。「ドアもあるぞ、ジョイコブ・マーレーの幽霊がはいつてきたドアだ。現在のクリスマスの精霊がこしをおろしていた隅があそこだ。うろつきまわる亡霊をみた窓があそこだ。全部真正銘本当のことだったんだ、実際に起こったんだ。はっはっは」

じつに、何年にもわたってこれっぽちも笑つてなかつた男にとつては、すごい笑いで、ちよつとやそつとの笑いではなかつた。これからつづく長い長いすばらしい笑いを予感させるものだった。

「今日が何日かもわからんな」 スクルージはひとりごちた。「精霊たちとどのくらいのときをすごしたかもわからんし、なんだつたのかも皆目わからん。まるで赤ん坊にでもなつたようだ。なにも気にすることはない、気にしないぞ。赤ん坊になつたほうがいいくらいだ。ヤッホー、イヤッホー」

そうしていると今まで聞いたこともないようなすばらしい鐘の音でその興奮状態はやぶられた。ゴーン、カーン、ドーン、カラン、ガラン、鐘の音だ。カラン、ガラン、鐘の音だ。ドーン、カーン、ゴーン、なんてすばらしいんだ、すばらしいすぎる。

そして窓のそばまでかけていくと、窓をあけ、頭を外にだした。霧ももやもない。晴れ渡ったすつきりした気持ちのいい、喜びがふつふつとわいてくるような、きりつとした寒さの、そう、肉沸き血踊るような寒さで、朝日のかがやく日だった。雲一つないすばらしい空で、さわやかなさっぱりした空気、耳をくすぐる鐘の音。なんてすばらしいんだ、すばらしいすぎる。

「今日は何日だい」スクルージは日曜に着るよそいきの服装をした、たぶんぶらぶらしてスクルージの方を見ていた子供によびかけた。

「なんですって？」少年はおどろきはてて答えた。

「今日は何日って聞いたんだよ、ぼうや」スクルージはくりかえした。

「今日？」少年は答えた。「クリスマスに決まってるよ」

「クリスマスだ」 スクルージはひとりごちた。「過ぎちやいな
かったんだ。精霊たちのことはたつた一晚で起きたことだつた
んだ。なんでも好きなようにできるんだな。もちろんそうに違
いない、もちろんできるだろうよ、やあ、ぼうや」

「こんちわ」少年は答えを返した。

「家禽商の店を知ってるかい、あの通りの一つの向こうの通り
の角にある」スクルージはたずねた。

「もちろん知ってるよ」少年は答えた。

「賢いぼうやだね」スクルージは言った。「りっぱなぼうやだ。
あそこにぶらさがっていたすばらしい七面鳥が売れたかどうか
知ってるかい？ 小さな七面鳥じゃないぞ、あの大きいやつだ」
「ぼくくらい大きいやつだよね」少年は聞いた。

「目はしつこいぼうやだ」スクルージは言った。「おまえと話し

てると楽しいよ、なあぼうや」

「まだあそこにぶらさがってるよ」少年は答えた。

「そうか」スクルージは言った。「行つて買つてくるんだ」

「冗談だろ」少年はさげんだ。

「いやいや」スクルージは言った。「いたつてまじめだよ。行つて買つてくるんだ。そんでここへ持つてくるように言つてくれ。

そうしたらどこへ持つて行けばいいのか伝えるから。だれか大人をつれておいで。おまえには一シリングやろう。五分以内にもどつてきたら、もう半クラウンおまけしようじゃないか」

少年は弾丸のように駆け出していった。この半分のはやさで銃を撃てるものでさえ、撃ち手としてはかなりの腕前といえよう。

「ボブ・クラチエットのところへ持つて行ってやろう」スクルー

ジは両手をこすりながら、笑いをこらえきれないようにつぶやいた。「誰が持ってきたかわからんだろうな。ちびっこタイムの二倍はあるぞ。ジョー・ミラー (訳注2) だってボブのところ」
にこんなものを持っていくような冗談は考えまいて」

スクルージが書いた住所はきれいなものではなかったが、ともかくにも書き上げた。そして通りに面したドアのところ降りていき、家禽商がくるのを待ち受けた。そこにたつて到着をまちうけていながら、ふとドアのノッカーが目にとまった。

「生きてる限りこいつを大事にしよう」スクルージは手でそれをたたきながら声をあげた。「以前はほとんど見てないもどろげなんだったけれど。その顔ときたらどれほどまじめな顔だろう。すばらしいノッカーだ。さあ七面鳥がきた、ヤッホー、イヤッホー。ごきげんよう、メリークリスマス」

まさに七面鳥だった。これじゃあ自分の足でたつことはできなかつただらうと思うほどだ、この鳥じゃ。たとえ立つたとしてもその足はろうそくみたいにすぐにポキンと折れてしまうだろう。

「ああ、これじゃあとてもカムデン・タウンまでもつていけない」 スクルージはつぶけた。「馬車にのらんとな」

こういうながらも笑いつづけ、笑いながら七面鳥の支払いをして、笑いながら馬車の支払いをして、少年にも笑いながら支払いを済ませた。その笑いをとめるものは、椅子にすわって息もたえだえにただ笑い、泣くまで笑うことだった。

ひげそりというものはなかなか難しいもので、ただひげそりだけをしていてもそうだ。ひげそりにはなかなか注意が必要で、ひげそりしながらおどるなんてとんでもない。ただ今のスクルー

ジならそうしていて鼻をそりおとしても、ただばんそうこうをはってよしとしたことだろう。

そして一張羅にきがえ、通りへとでかけていった。今の時期には街に人々があふれており、それは現在のクリスマスの精霊といっしょにみたときと同じだった。手を後ろにくんで歩いていると、スクールジはだれもが満面の笑みをうかべているように思えた。スクールジ自身もあまりにうれしさがこぼれんばかりに見えたので、三、四人の男が「ごきげんよう、だんなさん、メリークリスマス」と声をかけたくらいだった。後でスクールジもよく言ったことだが、「今まで耳にしたどんな楽しい言葉の中でも、その言葉がいちばん耳に心地よく響いたということだった」

それほどは歩かないうちに、自分の方につぶくのよい紳士

が向かってくるのが目に入った。昨日事務所にたずねてきて、「スクルージとマーレー商店ですか」といった紳士だった。この老紳士とでくわして自分のことをみたらどう思うだろうとスクルージは胸が痛んだが、まっすぐ紳士の方へと歩いていく道がわかつていたのでそうした。

「ごきげんよう」とスクルージは歩をはやめ、紳士の両手をにぎりしめ声をかけた。「ごきげんいかがですか。昨日は首尾良くいつてるといいんですが。あなたはとてもよくしてくれました。メリークリスマス」

「スクルージさんですか」

「ええ」とスクルージ。「わしの名前です、あんまりよく思わんことでしょうか。どうか許してください。この贈り物を受け取ってもらえますかな」とスクルージは紳士の耳へと何事かつ

ぶやいた。

「神のご加護がありますように」紳士は息も絶え絶えになったかのようになげんだ。「スクルージさん、本気ですか？」

「あなたさえよければね」スクルージは答えた。「ちやうどそれだけお願いします。今までためてた分もあわせてということはどうでしょう。そうお願いしてもよろしいですか？」

「ええ、もちろんです」紳士は握手をしながら答えた。「これほどこのご寄付にはなんといいやつら」

「なにもいわんでください、お願いですから」スクルージは答えた。「また訪ねてきてください。訪ねて下さいよ」

「もちろんです」老紳士は答えた。本当にそうするつもりであることは明白だった。

「ありがとう」スクルージも答えた。「本当にありがとう。何十

回でもいうよ、どうもありがとう、お幸せに」

スクルージは教会に行き、通りを歩き回り、人々がいそがしそうに行き来しているのを目にし、子供の頭をなで、物乞いにも話しかけ、家々の台所をのぞきこんだり、窓をみたり、そうしたことすべてが楽しかった。こうした散歩が、というかなにかが、これほど自分を幸せにしてくれるなどということはないもよらないことだった。午後には足を甥の家にもむけた。

何十回もドアの前をいつたりきたりして、とうとう勇気をもつてドアをノックした。とても大急ぎでノックしたのだ。

「ご主人は在宅かな」スクルージは対応してくれた少女にはなしかけた。素敵な少女だ、本当に。

「ええいます」

「どこかな、お嬢さん」スクルージは話しかけた。

「食堂にいます、奥さんもいつしよです。よければ二階にご案内しましょうか」

「ありがとう、でも知りあいだからいいよ」 スクルージはそういうと食堂のとびらに手をかけた。「中にいくよ」

スクルージはしずかにとびらをあげ、体をすべりこませた。二人はテーブルの方をむいていた（そしてテーブルの上はすばらしいことになっていた）。こうした若い主婦というものはいつもこういうことには神経質で、なにかもがちゃんとしていることを見るのが好きなものなのだ。

「フレッド」 スクルージは声をかけた。

びつくりぎょうてん。結婚している姪の驚いたことといったら。スクルージは姪が隅の椅子にこしかけていたのをすつかり忘れてしまっていた。そうでなければとつぜん声をかけるなん

てことは決してしなかつただろう。

「誰ですお祝いの言葉を言ってくれるのは」フレッドはさげんだ。「誰がきたんだい」

「わしだよ、叔父のスクルージだよ。夕食をあずかりにきたよ。入ってもいいかい、フレッド」

入ってもいいかだつて。腕をひきちぎられなかつたのが幸いとも言おうか。五分と立たないうちにすっかりくつろぐことができ、これほど心のこもつた歓待はまたとはなかつただろう。姪は前に見た通りで、やってきたトッパーもそのものだった。ふつくらした娘もやってきた。みなが勢ぞろいして、すばらしいパーティーだった。そしてすばらしいゲーム、すばらしき仲のよさとすばらしき幸福。

しかし翌朝はやくにスクルージは事務所にでかけていった。

実に早い時間にスクールジは事務所にいた。先にきていて、ボブクラチェットが遅れてくるのをつかまえよう。それこそがまさにスクールジが望んでいたことだった。

そしてまさしくその通りにした。そう、そのとおりに。時計は九時をさした。ボブはこない。十五分がすぎ、ボブはこない。まるまる十八分半遅れてボブはやってきた。スクールジはドアをいつぱいにあけ、部屋にはいつてくるのを見えるようにしていた。

ドアをあける前にボブは帽子をぬいだ。それはボブをあたためてくれるものだった。そしてまるで九時に追いつこうとでもしているかのようにすぐに椅子に腰掛け、ペンを走らせた。

「おはよう」スクールジはいつものものがみかみ声にできるかぎり似せて言った。「今日こんな時間にくるなんてどうことだ」

「とてもすいません、ご主人さま」ボブは言った。「遅れました」「そうだね」スクルージはくりかえした。「そうだね、遅れたね。いいからこつちへきたまえ」

「一年に一回のことです、ご主人さま」ボブは部屋から姿を現して嘆願した。「二度とくりかえしません。すこしばかり昨晩さわぎすぎたのです」

「ではどういふことか教えてやろう」スクルージは言った。「これ以上こういふことにはもう耐えられそうにないよ。そこでだ」スクルージは椅子から立ちあがり、ボブをぐいとふたたび自分の部屋にもどるくらい胸のあたりをおしながら、そう言った。「そこでだ、わしは君の給料をあげようとおもうんだが」

ボブはふるえて、定規の方へと近づいた。それでスクルージをぶちのめして、足止めし、外にいる人たちに助けをもとめ拘

東衣でも持つてきてもらおうと思つたのである。

「メリークリスマス、ボブ」スクルージは間違えようのない誠意をこめて背中をたたきそう言つた。「メリークリスマス、ボブ、今までわれわれがすごしたどのクリスマスよりずっといいクリスマスだ。給料を多くしよう。それに苦しい家族についてもやるだけのことをするようにしよう。今日の午後にもクリスマスのお祝いのお酒（訳注3）をあけながらそのことについて詳しく話そうじゃないか。ボブ、火をおこしなさい。もつと石炭を買うんだ、ボブ・クラチェット」

スクルージは言葉だけではなかつた。ちゃんと実行に移したし、それ以上のことをした。ちびっこタイムにとつては、かれは死ぬことはなかつたし、スクルージが第二の父親になつた。その上、よく知つている町やその他どこの古き良き町、街、市

においてもなかつたようなよい友人、主人、人間になつた。かれの人間のかわりようを見て笑うものもいた。しかしかれは笑うままにしておいて、そんなことには少しも氣をとめなかつた。というのも賢かつたので、どんないいことをしようとも、はじめはこの世では笑う人がたくさんいることを知っていたからだ。それにそんな人たちはいずれにせよ盲目みたいなもので、スクルージが思うには、そうした人たちはあざ笑うことでいつそう額にしわをよせ醜い姿をさらしているのだつた。スクルージは心で笑つていて、それでもつて彼には十分なのだつた。

それからスクルージは精霊とまじわりをもつことはなかつた。でもそれから何事にも節制した生活を送つた。そして生きてる人のなかで、かれほどクリスマスをすばらしいものにするためにはどうしたらいいかとよく知つているものはいないとまで

言われるようになった。どうかわれわれについて同じ事があ
てはまれればいいんだが、われわれ全員にとって。そしてちびっ
こタイムがいったように、神はわれわれ全員を祝福してくれる、
われわれ一人一人を。

訳注 1 ラオコーン トロイ戦争でのアポロの司祭。トロイに
木馬を持ちこますたと警告した。

訳注 2 ジョー・ミラー 18世紀のユーモア小説の作者

訳注 3 smoking bishop <http://www.stormfax.com/bishop.htm>

終わり

後書き

まずは訳の感謝から、クリスマスに感謝を。クリスマスがなきや夏の暑いさかりにかけてすっかり中断していた翻訳は永久に完成しなかったことでしょう。またいつもながらプロジェクト杉田玄白の主催者でもある山形浩生さんにも感謝を。

デイケンズの生涯なんかは、サマセットモームの世界の十大小説にて詳しいので、そちらをどうぞ。

あいかかわらず翻訳にはまちがい、勘違い、ケアレスミスとありとあらゆる災難（もちろん人災ですが）がつきものなので、訳者 (katoukui@yahoo.co.jp) まで教えていただければ幸い。

まあ、たまにはこういう話をじっくりよんでみるクリスマス

もなかなか悪くないんじゃないかと、物語が書かれてから150回以上たった今年のクリスマスにふと思ったりもするわけで、ではみなさん楽しんでください。

本翻訳は、この著作権表示を残す限りにおいて、訳者および著者にたいして許可をとったり使用料を支払ったりすることいっさいなしに、商業利用を含むあらゆる形で自由に利用・複製が認められる。「この著作権表示を残す」んだから、「禁無断複製」とかいうのはダメ)

プロジェクト杉田玄白 正式参加作品。詳細は<http://www.genpa>参照のこと。

クリスマス・キャロル (聖歌) A CHRISTMAS CAROL

クリスマス・キャロル (聖歌) A CHRISTMAS CAROL

底本：クリスマスキャロル 翻訳 1.00 版

チャールズ・ディケンズ著

katokt 訳 (katoukui@yahoo.co.jp)

A CHRISTMAS CAROL by Charles Dickens

(c) 2003 katokt

※この作品は青空文庫フォーマットに変換していますが、青空文庫作品ではありません。ご了承下さい。

※入力作業については、実際にはすでに HTML になっていたため、そのフォーマットを変換しただけのものです。また原文が横組だったため、一部算用数字と漢数字があったものを漢数字に統一しています。

入力：高橋征義

2010 年 12 月 23 日作成